

秋田県文化財調査報告書第369集

# 長野Ⅱ遺跡

—国道105号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003・12

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂(しろざか)遺跡出土の「岩偶」です。  
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

ながの  
長 野 II 遺 跡

— 国道105号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2 0 0 3 ・ 1 2

秋 田 県 教 育 委 員 会

## 序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、主要地方道をはじめとする地方道路網の整備・拡充は、人々の暮らしを支え、地域社会の経済・産業活動を支援する開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、国道105号改築工事に先立って平成14年度に森吉町米内沢で実施した長野Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、縄文時代前期の陥し穴や、平安時代の竪穴住居跡などが見つかかり、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県北秋田地域振興局建設部企画道路課、森吉町教育委員会、合川町教育委員会など関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成15年12月

秋田県教育委員会

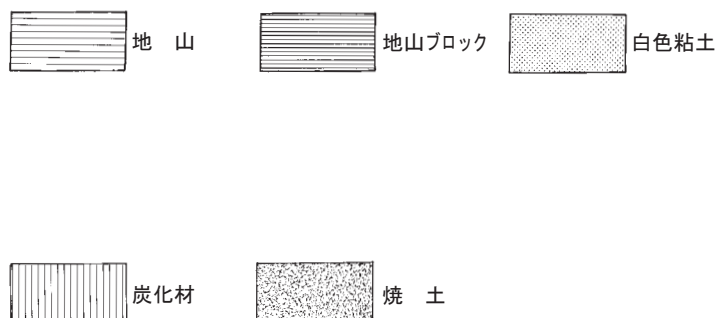
教育長 小野寺 清

## 例 言

- 1 本報告書は、国道105号国道道路改築事業に係る秋田県北秋田郡森吉町米内沢字長野88-6外に所在する長野Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査等については、すでに平成14年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料・秋田県埋蔵文化財センター年報21（平成14年度）・長野Ⅱ遺跡発掘調査資料として一部を公表したが、本報告書の記載内容がすべてに優先する。
- 2 第5章の自然科学分析には、株式会社古環境研究所に業務委託した分析報告書を編集し収載した。
- 3 本報告書挿図中に使用した土層表記法は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1989年版』を使用した。
- 4 本報告書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行25,000分の1「桂瀬」「米内沢」、および秋田県北秋田建設事務所提供の工事図面である。
- 5 本書の草稿は、第1章第1節と第2章を石澤宏基、第3章第3節と第4章第1節を遠藤元、第4章第1節を横山香菜子、その他の執筆と全体編集は藤澤一史が行った。

## 凡 例

- 1 遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号と検出順の通し番号を付した。精査の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。  
遺構 S I・・・堅穴住居跡      S K I・・・堅穴状遺構      S K T・・・陥し穴状遺構  
S E・・・井戸跡      堅穴住居内の柱穴の略号は、Pとした。  
遺物 R P・・・土器      S・・・石
- 2 遺跡基本層位の土層注記にはローマ数字を用いた。
- 3 挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず通し番号を付し、図版中の番号と対応させている。また、挿図中の出土地点は、遺構番号の他にグリッド番号を用いて記載した。
- 4 基本的に遺構実測図は1/20及び1/10、遺物実測図は1/2及び1/3の縮尺で掲載した。しかし挿図割付の関係上、さらに若干の縮小を施した挿図がある。各頁に付したスケールを参照されたい。



# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第2章 遺跡の位置と立地	3
第1節 遺跡の立地	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	6
第1節 遺跡の概観	6
第2節 調査の方法	6
第3節 発掘調査の経過	7
第4章 調査の記録	9
第1節 基本層序	9
第2節 検出遺構と出土遺物	9
1 縄文時代	9
2 古代	17
3 近世	25
第3節 遺構外出土遺物	26
第5章 自然科学分析	27
第1節 花粉分析	27
第2節 樹種同定	31
第3節 植物珪酸体分析	32
第4節 放射性炭素年代測定結果	35
第6章 まとめ	37
報告書抄録	

# 挿図・表・図版目次

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	周辺遺跡位置図	5
第3図	遺構配置図及びグリッド配置図	8
第4図	基本土層	10
第5図	検出遺構（陥し穴）と出土遺物	11
第6図	検出遺構（陥し穴）	14
第7図	検出遺構（陥し穴）	16
第8図	S I 03堅穴住居跡・カマド	18
第9図	S I 03・S K I 02	19・20
第10図	遺構内出土遺物	22
第11図	遺構内出土遺物	23
第12図	検出遺構（井戸跡）	25
第13図	遺構外出土遺物	26
第14図	S K 08地点及びS K 12地点における花粉ダイアグラム	30
第15図	S I 03における植物珪酸体分析結果	34

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	5
第2表	S I 03関連柱穴様ピット一覧	21
第3表	S K I 02関連柱穴様ピット一覧	24
第4表	花粉分析結果	29
第5表	樹種同定結果	32
第6表	植物珪酸体分析結果	34
第7表-①	試料と方法	35
第7表-②	測定結果	35

## 図 版 目 次

図版1	空から見た長野Ⅱ遺跡
図版2	遺構 1. S K T 11陥し穴断面 2. S K T 11陥し穴完掘 3. S K T 12陥し穴断面 4. S K T 12陥し穴完掘 5. S K T 25陥し穴断面 6. S K T 陥し穴完掘
図版3	遺構 1. S K I 02堅穴状遺構・S I 03堅穴住居跡確認 2. S I 03堅穴住居跡作業風景 3. S I 03堅穴住居跡土師器出土状況 4. S I 03堅穴住居跡土師器出土状況 5. S I 03堅穴住居跡壁溝内板材跡 6. S I 03堅穴住居跡壁溝内板材跡 7. S I 03堅穴住居跡完掘 8. S K I 02完掘
図版4	遺構 1. S I 03堅穴住居跡カマド確認 2. S I 03堅穴住居跡カマド内支脚出土状況 3. S E 01井戸跡断面 4. S E 01井戸跡遺物出土状況 5. S E 01井戸跡完掘 6. S E 01作業風景 7. 作業風景 8. 作業風景
図版5	遺物
図版6	遺物
図版7	自然科学分析 1. 花粉分析 2. 樹種同定 3. 植物珪酸体分析

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

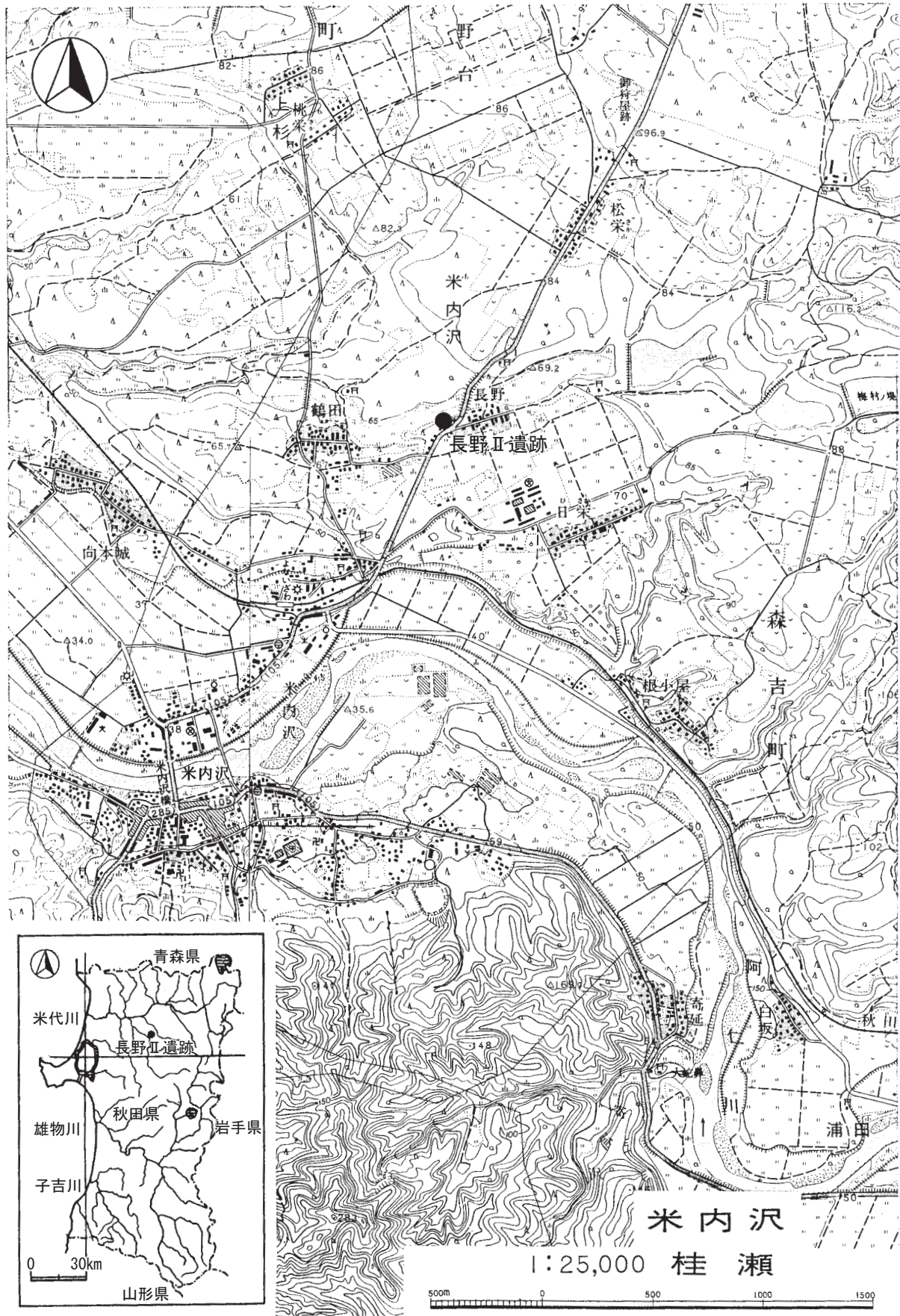
秋田県北秋田郡森吉町内を通る一般国道105号は、本荘市出戸町字井戸尻地内を起点とし、北秋田郡鷹巣町綴子字大堤地内を終点とする全長171.753kmの国道である。現在、秋田県が管理する国道の中では、この105号が最も長く、通過する市町村の多さからも県内交通網の骨格をなす幹線道路である。

しかし、森吉町米内沢地区の現道は、幅員が狭隘で大型車両の通行が困難な上、国道105号と285号の交点および主要地方道二ツ井森吉線の交点が、米内沢橋付近で結節しているため、信号機と交差点が多数連続する通行上の隘路となっている。また、沿道には商店が連なり、森吉町の中心街を形成していることから、歩行者が多く車両通行量も大幅に増加している。秋田県北秋田土木事務所（現：秋田県北秋田地域振興局建設部）は現道の安全性・利便性を高める必要から、森吉町寄延地内を起点とし、森吉町松栄地内を終点とする全長3,550mの「国道105号国道道路改築事業」を平成3年度に策定、着手した。本事業の工事路線内には、埋蔵文化財包蔵地として周知の遺跡である諏訪岱Ⅱ遺跡が存在することが判明していた。このため、秋田県教育委員会は、道路建設部分に所在する遺跡の確認調査を平成12年以降に実施したところ、発掘調査による記録保存が必要である場所があることが判明した。阿仁川左岸の諏訪岱Ⅱ遺跡、同右岸の長野岱Ⅲ遺跡、長野Ⅱ遺跡である。この内、秋田県埋蔵文化財センターは、道路の建設に先立って、平成13年度に諏訪岱Ⅱ遺跡と長野岱Ⅲ遺跡の発掘調査を実施、平成14年5月14日から6月15日までの期間、長野Ⅱ遺跡の発掘調査を実施するに至った。

## 第2節 調査要項

遺 跡 名	長野Ⅱ遺跡（ながのにいせき）：遺跡略号 2NN-Ⅱ
遺跡所在地	秋田県北秋田郡森吉町米内沢字長野88-6外
調査期間	平成14年5月13日～平成14年6月14日
調査目的	国道105号国道道路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査
調査面積	1,830㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	藤澤 一史（秋田県埋蔵文化財センター 南調査課 調査班 学芸主事） 遠藤 元（秋田県埋蔵文化財センター 南調査課 調査班 非常勤職員） 横山香菜子（秋田県埋蔵文化財センター 南調査課 調査班 非常勤職員）
総務担当者	佐藤 悟（秋田県埋蔵文化財センター 総務課 課長） 高橋 修（秋田県埋蔵文化財センター 総務課 主任） 成田 誠（秋田県埋蔵文化財センター 総務課 主事）
調査協力機関	秋田県北秋田地域振興局建設部 森吉町教育委員会 合川町教育委員会





第1図 遺跡位置図

## 第2章 遺跡の位置と立地

### 第1節 遺跡の立地

長野Ⅱ遺跡は、秋田県北秋田郡森吉町米内沢字長野に所在する。遺跡のある森吉町は秋田県内陸北部に立地し、町南東部にそびえる森吉山(1,454m)を仰ぎ見る豊かな自然に囲まれた町である。

森吉山系に源を発し、森吉町を貫流する阿仁川は、全長が約62.3kmあり、中流域で小又川や小阿仁川、長野Ⅱ遺跡の側を流れる長野沢川などの支流を合わせつつ、二ツ井町麻生集落付近で米代川に合流する。この阿仁川流域の河岸段丘上では、縄文土器や土師器・須恵器などを出土する遺跡が多い。

長野Ⅱ遺跡は、秋田内陸縦貫鉄道米内沢駅から南東へ約1km、森吉町役場から北西に約1.75kmの阿仁川の支流長野沢川左岸段丘上に位置する。遺跡のすぐ北側を長野沢川、約700m南には阿仁川が流れ、この二河川が形成した西に突き出す舌状の河岸段丘上に位置する。また、県北部有数の規模をもつ大野台台地の南東縁辺部にあたる。大野台台地は、成因的には阿仁川による河成段丘であるが、地表面は十和田火山灰が覆っているため、形態的にはローム段丘とも称される。遺跡の標高は、65～66mである。

### 第2節 歴史的環境

1991年刊行の『秋田県遺跡地図(県北版)』によると、森吉町には、58箇所の埋蔵文化財包蔵地があることが記載されている。長野Ⅱ遺跡周辺の阿仁川流域では、同川を成因とする河岸段丘上に立地する遺跡が多い。第2図の周辺遺跡位置図からは、中世城館を除くと概ね標高100m未満の低位の段丘上に立地していることを読み取ることができる。

森吉町では、現在まで旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代早期の遺跡については、桂の沢遺跡、桐内A・C・D遺跡、地蔵岱遺跡などの9遺跡がある。この内、桂の沢遺跡からは貝殻沈線文と条痕文が施された土器が出土している。また、桐内A・C・Dの各遺跡からは早期に相当する尖底土器片等が出土している。縄文時代前期の遺跡としては、長野Ⅱ遺跡に程近い長野岱Ⅰ遺跡があり、前期後半(円筒下層c式期)に相当する土器片が出土している。その後、中期～晩期の遺跡は次第に多くなり、塚の岱、白坂は昭和初期から知られる晩期の大規模遺跡である。弥生時代(続縄文文化)に相当する遺物は、吉野Ⅰ、長野岱Ⅰ遺跡で出土している。

平安時代では、狐岱遺跡、諏訪岱遺跡で竪穴住居跡が検出され、この時代の集落が確認されている。中世以降の遺跡では、いわゆる城館が御獄館、米内沢城、根小屋館、浦田館などが知られている。これらの遺跡のうち、過去に発掘調査された遺跡についてその概略を示しておく。

塚の岱遺跡は、白坂遺跡の北東に隣接する遺跡である。両遺跡は一連の大規模な縄文時代後期末～晩期前半を主とする集落跡であることが判明している。1968年の発掘調査により、晩期前半の土器(鉢型、壺型、注口など)と土偶などが出土している。

## 第2章 遺跡の位置と立地

狐岱遺跡は、本遺跡の南約1.3kmの阿仁川左岸河岸段丘上に立地している。1954年に大和久震平氏による発掘調査が行われ、縄文時代前期後半～中期中頃の円筒土器を出土する遺跡として知られるようになった。その後、森吉山ダム建設事業（代替農地・宅地造成）に係り、1989年には範囲確認調査が実施された。この結果、主に縄文時代前期後半～後期前半の大規模な集落跡（推定面積約15万㎡）であることが判明し、同時に調査した吉野Ⅰ・Ⅱ遺跡、山崎遺跡と共に、遺跡全体が盛土した後に水田化され、保存された。

長野岱Ⅰ遺跡は、本遺跡の南東約1.0kmに位置する。堤沢川流路溝工事に及び仮称「ふるさと村整備事業」に係る発掘調査が、1991年・92年に行われ、縄文時代の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡12軒、柵状遺構1条が検出された。

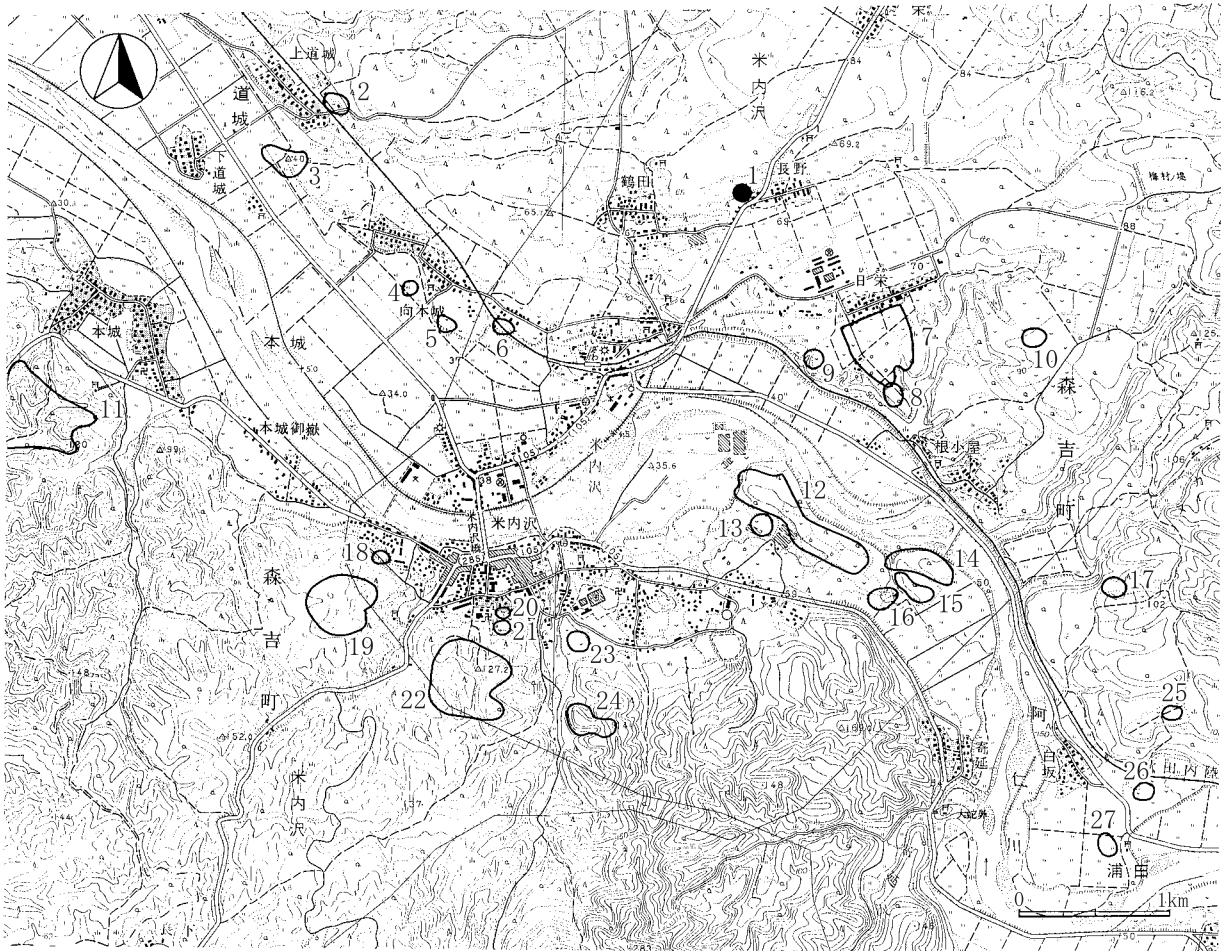
また、本遺跡の南約700mにある長野岱Ⅲ遺跡と南約2.0kmに位置する諏訪岱Ⅱ遺跡では、前年度発掘調査が行われている。長野岱Ⅲ遺跡では平安時代の竪穴住居跡5軒、諏訪岱Ⅱ遺跡では7軒確認されており、長野Ⅱ遺跡とほぼ同時期の遺跡と捉えることができる。

なお、周辺遺跡一覧に記載した遺跡に記した地図No.は、周辺遺跡位置図と対応する。また、地図No.につづく番号は、『秋田県遺跡地図（県北版）』に付されているものである。

### 引用・参考文献

- 森吉町教育委員会 『長野岱Ⅰ遺跡』1967(昭和42)年
- 森吉町教育委員会 『諏訪岱遺跡～堤沢川流路溝工事に係る発掘調査報告～』1992(平成4)年
- 森吉町教育委員会 『諏訪岱遺跡ほか発掘調査略報～分布調査～』1992(平成4)年
- 大和久震平 「北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告」『昭和三十二年度調査研究報告』  
秋田県文化財保護協会 1958(昭和33)年
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県北版)』1991(平成3)年
- 秋田県教育委員会 「狐岱遺跡」『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第201集 1990(平成2)年
- 秋田県教育委員会 『白坂遺跡発掘調査報告書－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘報告－』  
秋田県文化財調査報告書第244集 1990(平成6)年





第2図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧

地図No.	番号	遺跡名	所在地	時代	備考
	1	長野Ⅱ	森吉町米内沢字長野88-6外	縄文時代、平安時代	遺物包含地
	2	19-07 大野	合川町上道城字大野1	縄文中期	遺物包含地
	3	19-08 小堤岱	合川町道城字小堤岱51-2	縄文後期、平安時代	遺物包含地
	4	13-03 向本城	森吉町米内沢字本城字向屋敷3	縄文時代	遺物包含地
	5	13-04 桐木岱A	森吉町米内沢字桐木岱38	縄文晩期	遺物包含地
	6	13-05 桐木岱B	森吉町米内沢字桐木岱20	縄文晩期	遺物包含地
	7	13-22 根小屋館	森吉町米内沢字長野岱56-1	中世	館跡
	8	13-21 長野岱Ⅰ	森吉町米内沢字長野岱56-1	縄前・中期、平安時代	遺物包含地
	9	13-20 長野岱Ⅱ	森吉町米内沢字長野岱346-1	縄文中期	遺物包含地
	10	13-22 根小屋館	森吉町米内沢字長野岱56-1	中世	館跡
	11	13-06 阿仁城	森吉町本城字寺ノ沢201、館ノ下10	中世	館跡
	12	13-16 狐岱	森吉町米内沢字狐岱88	縄前・中・晩期、平安時代	遺物包含地
	13	13-15 冷水岱	森吉町米内沢字冷水岱77-1	縄前・中期、平安時代	遺物包含地
	14	13-19 吉野Ⅱ	森吉町米内沢字吉野5-1	縄前・中期、平安時代	遺物包含地
	15	13-18 吉野Ⅰ	森吉町米内沢字吉野13-1	縄文後・晩期	遺物包含地
	16	13-17 山崎	森吉町米内沢字山崎57-1	縄文時代	遺物包含地
	17	13-24 浦田うるし沢	森吉町浦田字うるし沢50-1	縄文時代	遺物包含地
	18	13-07 御嶽	森吉町米内沢字御嶽62-1	平安時代	遺物包含地
	19	13-08 御嶽館	森吉町米内沢字高御嶽2	中世	館跡
	20	13-13 寺の上Ⅰ	森吉町米内沢字寺ノ上12-28	縄文晩期	遺物包含地
	21	13-12 寺の上Ⅱ	森吉町米内沢字寺ノ上27-1	平安時代	遺物包含地
	22	13-11 米内沢城	森吉町米内沢字寺ノ上77-1	中世	館跡
	23	13-14 伊勢の森	森吉町米内沢字伊勢の森52-57	平安時代	遺物包含地
	24	13-11 米内沢城	森吉町米内沢字倉ノ沢出口99-5	中世	館跡
	25	13-25 比内道下山根	森吉町浦田字白坂山根92	縄文後期	遺物包含地
	26	13-26 塚の岱	森吉町浦田字塚の岱80	縄文晩期	遺物包含地
	27	13-27 白坂	森吉町浦田字白坂上岱19-22	縄文後・晩期	遺物包含地

※上記の番号は、秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県北版）』1991（平成3年）による。

## 第3章 調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

長野Ⅱ遺跡は、大野台地を流れる長野沢川が形成した左岸段丘上に位置する。調査区は1,830㎡あり、国道105号をはさみ、便宜上北側をA区(1,700㎡)、南側をB区(130㎡)として調査を進めた。

調査の結果、縄文時代に属する陥し穴14基と平安時代に属する竪穴住居跡1軒、同時期の竪穴状遺構1基、近世の井戸跡1基を確認した。

調査対象A区中央と同区北端崖際からは、縄文時代前期に属する陥し穴を2列確認した。平面形で、円形のもの11基、楕円形のもの2基である。この他に溝状のものを1基確認した。陥し穴と考えたのは、それぞれから土坑底部ほぼ中央に逆茂木を立てたと考えられる柱穴を確認したことによる。これら陥し穴の周辺からは、縄文時代前期後半に相当する円筒下層d式土器が見つかった。

また、陥し穴の底部から採取した炭化物の14C年代測定から縄文時代前期に相当する年代が得られたことなどから、この時期に作られた陥し穴であることがわかった。

A区からは、平安時代の竪穴住居跡と竪穴状遺構を確認した。この2遺構は重複し、新旧関係は、竪穴状遺構を竪穴住居跡が切っている。竪穴状遺構は、建て替え前の竪穴住居跡である可能性が高いものの、その根拠は見つからず、これを竪穴状遺構に留めた。竪穴住居跡は、出土した土師器や須恵器の特徴から10世紀後半に属する。

B区からは、井戸跡を検出した。その作りは粗雑なもので、中からは、近世の陶磁器や砥石が出土した。一般的な同時期の井戸と比べ深さは1.70mと浅かった。

### 第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、調査区内の任意の1点(国家座標X系: X=14852.257 Y=-38160.395)を選定し、これを原点(MA50)とした。この原点から座標北方向に基準線を設定し、この基準線に直交する4m×4mのグリッドを設定した。また数ヶ所の杭を水準測量して水準原点とした。グリッド杭には東から西に向かって南北方向を示す…LS・LT・MA・MB・MC…というアルファベットと、南から北に向かって南北方向を示す…48・49・50・51・52…の2桁の数字を組み合わせた記号を記入し、4m×4mの方眼杭の南東端をグリッドの名称とした。

調査区は1,830㎡をA区(1,700㎡)・B区(130㎡)の2つに分け、調査は両調査区を同時進行で行った。第一段階として表土から漸移層まで掘り下げ、第二段階として地山面まで掘り下げ、遺構を確認した。

検出された遺構には、種別を問わず確認した順に番号を付し、精査の結果、遺構と判断されなかったものについては欠番とした。遺構プランは、表面土色観察、実測用ベルトを設定して掘り下げ、土層断面の分層時に野帳に堆積状態をスケッチして土色・土性等を記入した。

遺物は、グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺物の記載は、メジャーおよび自動レベルを使用して人手で行った。

調査の記録は、平面図・断面図および写真を用いた。平面図・断面図は縮尺1/20を原則としたが、微細な遺構図面を必要とする際には1/10で記録した。

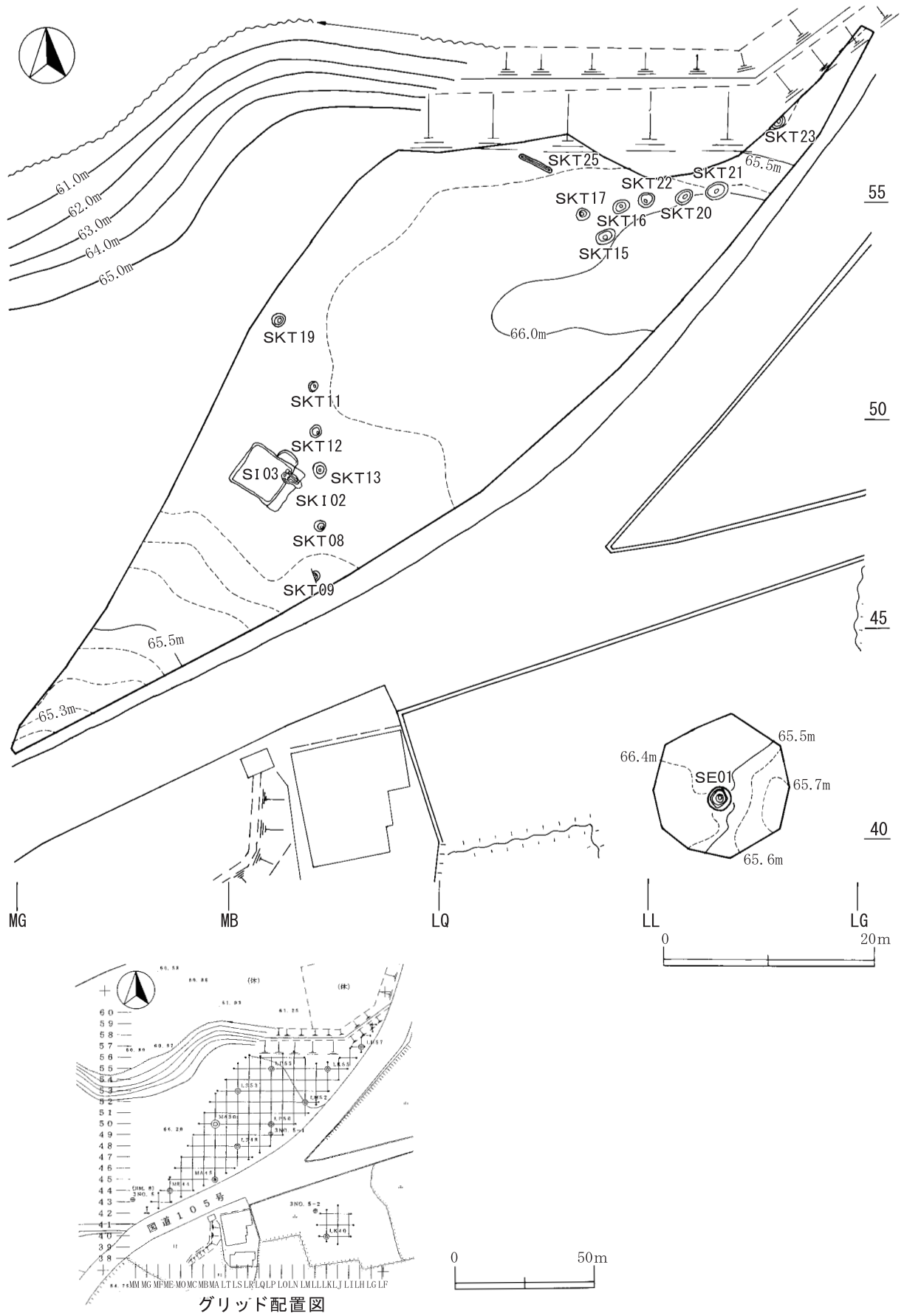
写真撮影は、35mmのモノクロおよびリバーサルフィルムを使用した。

室内における整理は、遺構については現場で図化した平面図・断面図から第2原図を作成し、それをトレースして挿図を作成した。遺物は洗浄・注記の後、同一個体と思われるものは接合・復元し、実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

### 第3節 調査の経過

現場発掘調査は、平成14年5月13日～6月14日まで実施した。

5月13日、現地に資材やコンテナハウスを搬入、午前中は、発掘作業員に対する作業内容の説明と提出書類の点検を行った。同日午後には、現場設営と環境整備を行った。また調査区では、測量会社によるグリッド打設業務が行われた。5月14日、前日に引き続き現場設営と調査区の安全対策を講じた。平行して調査区の草刈りを行った。同日午後には、B区のジョレンがけを開始した。5月15日、表土除去ですでに確認されていたA区竪穴住居跡とB区井戸跡周辺をジョレンがけした。同日、測量会社によるグリッド打設業務が終了した。5月16日、A区西端部から遺構確認作業のためのジョレンがけを開始した。同日、竪穴住居跡の精査に着手した。5月17日、竪穴住居跡確認状況写真撮影のため、ローリングタワーを設置した。ジョレンがけが進むにつれて、土坑（後のSKT）が次々に確認された。同日、週末に備え、調査区の雨・風対策と清掃作業を行った。5月20日、基本土層の写真撮影を行った。B区井戸跡を精査、断面図の作成を行った。5月23日、A区北端部崖際にあった多くの木の根の除去を行った。5月28日、B区の地形測量を行った。5月30日、安全管理指導員鈴木氏が来跡した。同日、A区の地形測量を行った。土坑列の精査を本格化させた。6月10日、ローリングタワーを設置し、A区中央土坑列写真撮影。6月11日、A区東崖側土坑列の写真撮影を行った。精査が終了した土坑列は、安全対策のため埋め戻しを行った。6月12日、A区、南西方向ローリングタワー上より全景写真撮影を行った。6月13日、平面実測が終了した。同日S I 02の精査が終了した。また、この日撤収作業を開始した。同日、北秋田建設事務所、センター、文化財保護室立会いのもと現場引き渡しに関する協義を行った。6月14日、発掘器材等トラックへ積み込み、作業員を見送り全工程を無事終了した。



第3図 遺構配置図及びグリッド配置図

## 第4章 調査の記録

### 第1節 基本層序

遺跡の土層は、近年の土地改良等により、削平されたり盛土されていたため、堆積状態には、当時を知る手がかりになる部分はほとんど残されていなかった。周囲の遺跡の調査では、十和田 a 降下火山灰が顕著に見られるが、長野Ⅱ遺跡では、近世から現代に至る大規模な耕地整理によって土の移動が大きく、全く確認できなかった。基本層序は、土の移動のない表土から地山面までの層厚が最も厚い南西端に近い場所にセクションを設定し観察した。しかし、部分的に攪乱を受けている。詳細は、第4図に示したとおりである。

### 第2節 検出遺構と出土遺物

発掘調査では、縄文時代の陥し穴14基、平安時代の竪穴住居跡1軒、同時期と推定される竪穴状遺構1基、近世の井戸跡1基を検出した。遺物は、竪穴住居跡から土師器や須恵器が出土した。

#### 1 縄文時代

検出した縄文時代の遺構は、陥し穴14基で、調査区中央部に6基と調査区北端に8基あった。確認面での形状は溝状が1基、円形・楕円形・隅丸方形のものが13基である。このうち遺物が出土した陥し穴は、SKT15のみである。

#### SKT08陥し穴（第5図）

〔位置と確認〕 LS47グリッドの第Ⅳ層で確認した。

〔規模と形態〕 長径1.05m、短径1.00m、深さは0.89mで隅丸方形である。ほぼ筒状に掘り込まれており、底面から開口部付近までは垂直に近く立ち上がり、そこからは外傾しながら開いている。

〔底面〕 長径0.68m、短径0.66mの隅丸方形である。底面は平坦であるが、中央よりやや北側に径0.25×0.22m、深さ0.14mの柱穴状の方形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 壁面の地山崩落土を含む自然堆積である。堆積土下位は水気を帯びる。

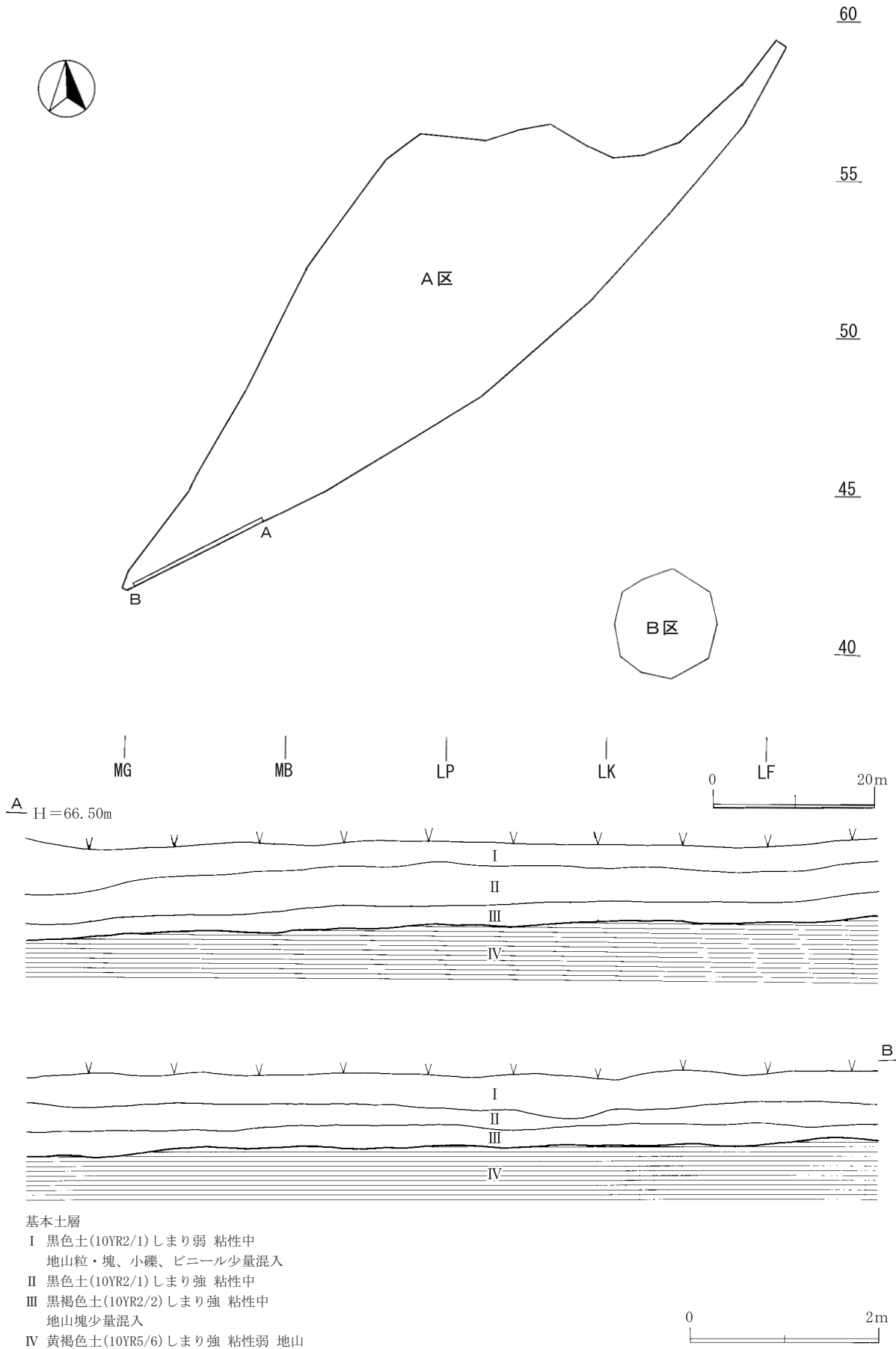
〔時期〕 AMS<sup>14</sup>C年代測定によると縄文時代前期の年代が得られた。

#### SKT09陥し穴（第5図）

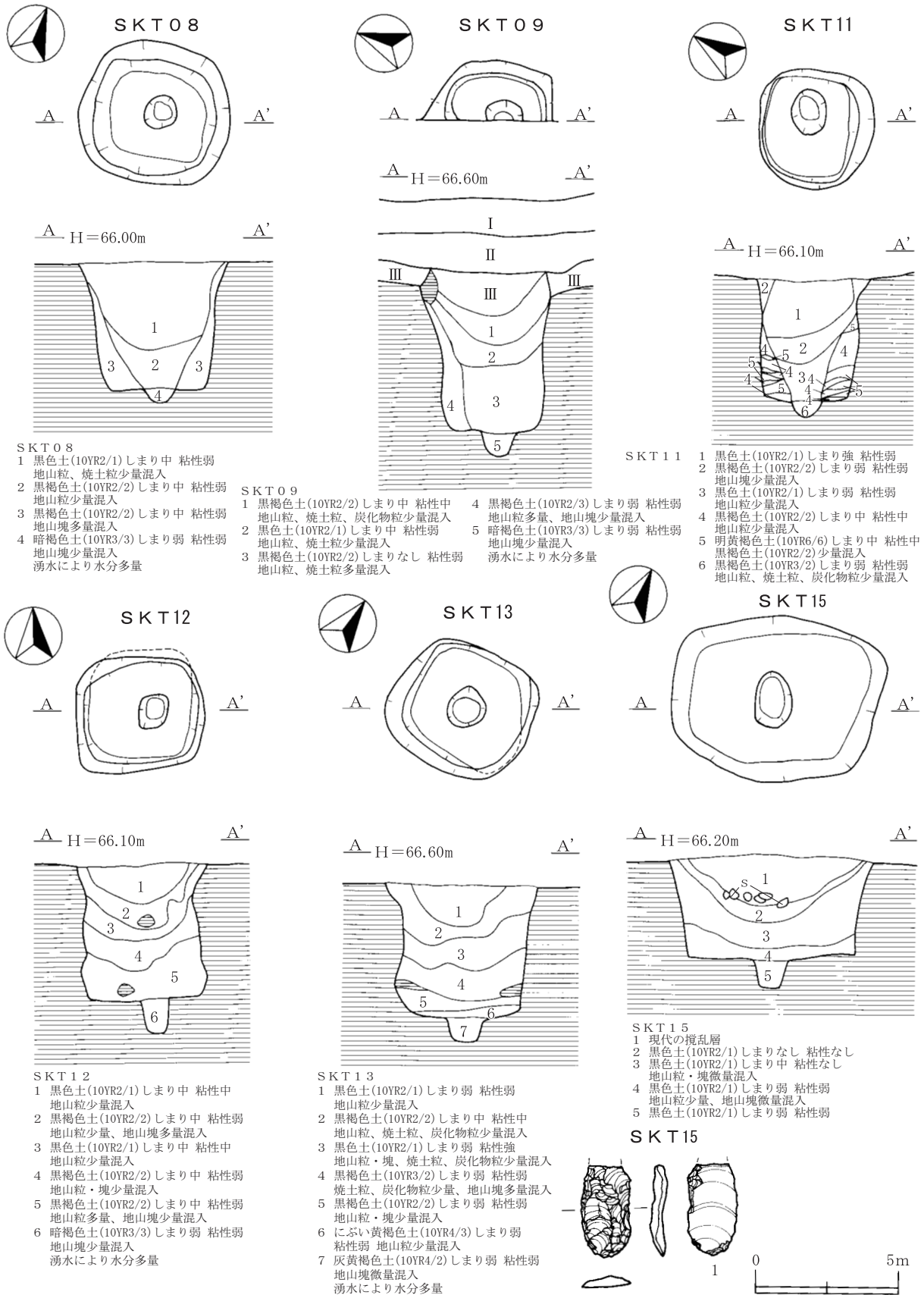
〔位置と確認〕 LS・LT45・46グリッドの第Ⅲ層で確認した。本遺構西側は、調査区外に伸びているため調査できなかった。

〔規模と形態〕 堆定で長径1.00m、短径0.90m、深さは0.89mの隅丸方形を呈するものと思われる。深さは0.98mである。ほぼ筒状に掘り込まれており、南壁は底面から垂直に近く立ち上がり、北壁は、中位までは垂直に近く立ち上がり、そこからは外傾して開いている。





第4図 基本土層



SKT08

- 1 黒色土(10YR2/1)しまり中 粘性弱  
地山粒、焼土粒少量混入
- 2 黒褐色土(10YR2/2)しまり中 粘性弱  
地山粒少量混入
- 3 黒褐色土(10YR2/2)しまり中 粘性弱  
地山塊多量混入
- 4 暗褐色土(10YR3/3)しまり弱 粘性弱  
地山塊少量混入  
湧水により水分多量

SKT09

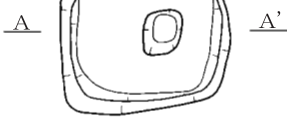
- 1 黒褐色土(10YR2/2)しまり中 粘性中  
地山粒、焼土粒、炭化物粒少量混入
- 2 黒色土(10YR2/1)しまり中 粘性弱  
地山粒、焼土粒少量混入
- 3 黒褐色土(10YR2/2)しまりなし 粘性弱  
地山粒、焼土粒多量混入
- 4 黒褐色土(10YR2/3)しまり弱 粘性弱  
地山粒多量、地山塊少量混入
- 5 暗褐色土(10YR3/3)しまり弱 粘性弱  
地山塊少量混入  
湧水により水分多量

SKT11

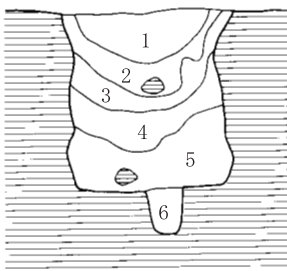
- 1 黒色土(10YR2/1)しまり強 粘性弱
- 2 黒褐色土(10YR2/2)しまり弱 粘性弱  
地山塊少量混入
- 3 黒色土(10YR2/1)しまり弱 粘性弱  
地山粒少量混入
- 4 黒褐色土(10YR2/2)しまり中 粘性中  
地山粒少量混入
- 5 明黄褐色土(10YR6/6)しまり中 粘性中  
黒褐色土(10YR2/2)少量混入
- 6 黒褐色土(10YR3/2)しまり弱 粘性弱  
地山粒、焼土粒、炭化物粒少量混入



SKT12



A H=66.10m A'

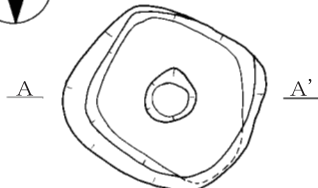


SKT12

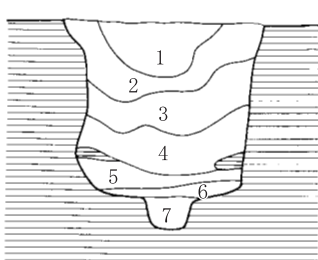
- 1 黒色土(10YR2/1)しまり中 粘性中  
地山粒少量混入
- 2 黒褐色土(10YR2/2)しまり中 粘性弱  
地山粒少量、地山塊多量混入
- 3 黒色土(10YR2/1)しまり中 粘性中  
地山粒少量混入
- 4 黒褐色土(10YR2/2)しまり中 粘性弱  
地山粒・塊少量混入
- 5 黒褐色土(10YR2/2)しまり中 粘性弱  
地山粒多量、地山塊少量混入
- 6 暗褐色土(10YR3/3)しまり弱 粘性弱  
地山塊少量混入  
湧水により水分多量



SKT13



A H=66.60m A'

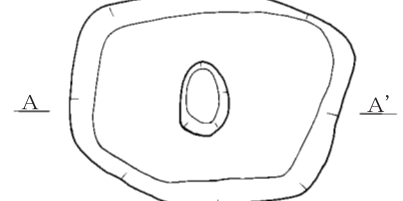


SKT13

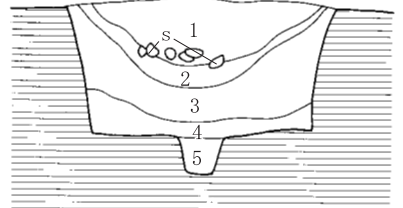
- 1 黒色土(10YR2/1)しまり弱 粘性弱  
地山粒少量混入
- 2 黒褐色土(10YR2/2)しまり中 粘性中  
地山粒、焼土粒、炭化物粒少量混入
- 3 黒色土(10YR2/1)しまり弱 粘性強  
地山粒・塊、焼土粒、炭化物粒少量混入
- 4 黒褐色土(10YR3/2)しまり弱 粘性弱  
焼土粒、炭化物粒少量、地山塊多量混入
- 5 黒褐色土(10YR2/2)しまり弱 粘性弱  
地山粒・塊少量混入
- 6 にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり弱  
粘性弱 地山粒少量混入
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2)しまり弱 粘性弱  
地山塊微量混入  
湧水により水分多量



SKT15



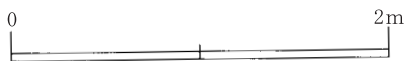
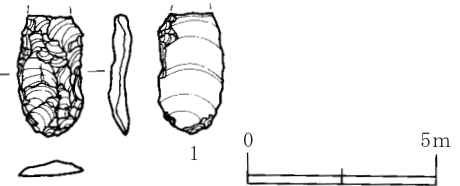
A H=66.20m A'



SKT15

- 1 現代の攪乱層
- 2 黒色土(10YR2/1)しまりなし 粘性なし
- 3 黒色土(10YR2/1)しまり中 粘性なし  
地山粒・塊微量混入
- 4 黒色土(10YR2/1)しまり弱 粘性弱  
地山粒少量、地山塊微量混入
- 5 黒色土(10YR2/1)しまり弱 粘性弱

SKT15



挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
5-1	5-1	SKI15	剥片	(32)	13	6	3.3

第5図 検出遺構(陥し穴)と出土遺物

〔底面〕 推定で長径0.85m、短径0.70mの隅丸方形を呈するものと思われる。底面は平坦であるが、中央よりやや南側に径0.30×0.25m、深さ0.17mの柱穴状の方形ピットが掘り込まれている。湧水のため底面は常に水に浸かっていた。

〔堆積土〕 本遺構壁面の地山崩落土を含む自然堆積土である。堆積土下位は水気を帯びる。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。

#### S K T 11 陥し穴 (第5図)

〔位置と確認〕 L S・L T 50グリッドの第Ⅲ層で確認した。

〔規模と形態〕 長径0.82m、短径0.80m、深さは0.83mで隅丸方形である。ほぼ筒状に掘り込まれており、底面から開口部付近までは垂直に近く立ち上がり、そこからは外傾しながら開いている。

〔底面〕 長径0.70m、短径0.66mの隅丸方形である。底面は平坦であるが、中央よりやや北東側に径0.32×0.24m、深さ0.24mの柱穴状の方形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 壁際の黒褐色土と明黄褐色土が交互に堆積していた。堆積状況から考え自然堆積と判断した。逆茂木の周囲に土が自然堆積し、木が腐るか抜かれるかした後に1～3層の土が堆積したのではないかと考えた。堆積土下位は、微量な湧水のため水気を帯びていた。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。

#### S K T 12 陥し穴 (第5図)

〔位置と確認〕 L S・L T 49グリッドの第Ⅲ層で確認した。

〔規模と形態〕 長径0.90m、短径0.80m、深さは0.94mで隅丸方形である。ほぼ筒状に掘り込まれており、底面から開口部付近までは西壁はやや湾曲、東壁は内傾しながら立ち上がり、そこからはともに外傾しながら開いている。

〔底面〕 長径0.78m、短径0.72mの隅丸方形である。底面は平坦であるが、中央よりやや東側に径0.25×0.19m、深さ0.23mの柱穴状の方形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 堆積状況から自然堆積と判断した。

〔時期〕 AMS 14C年代測定によると縄文時代前期の年代が得られた。

#### S K T 13 陥し穴 (第5図)

〔位置と確認〕 L S 48グリッドの第Ⅲ層で確認した。

〔規模と形態〕 長径1.00m、短径0.95m、深さは0.92mで隅丸方形である。ほぼ筒状に掘り込まれており、底面から開口部付近まで、北東壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南西壁は下位にてやや外反してそこから垂直に立ち上がり、開口部からはともに外傾しながら開いている。

〔底面〕 長径0.86m、短径0.70mの隅丸方形である。底面は平坦であるが、ほぼ中央部に径0.27×0.23m、深さ0.15mの柱穴状の方形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 堆積状況から本遺構壁面の地山崩落土を含む自然堆積と判断した。底面よりの湧水のため覆土下位に下がるにつれ、水気を帯びる。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。

#### S K T 15 陥し穴 (第5図)

〔位置と確認〕 L L 54・L M 53・54グリッドの第Ⅳ層で確認した。

〔規模と形態〕 長径1.50m、短径1.18m、深さは0.72mで隅丸方長形である。ほぼ筒状に掘り込ま

れており、底面から緩やかに外傾しながら開いている。

〔底面〕 長径1.24m、短径0.94mの隅丸長方形である。底面は平坦であるが、ほぼ中央部に径0.38×0.25m、深さ0.20mの柱穴状の楕円形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 1・2層は現代の攪乱である。3・4層は腐植土の自然堆積と判断した。

〔出土遺物〕 覆土下位より剥片1点（第5図）が出土した。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。

#### SKT16陥し穴（第6図）

〔位置と確認〕 LL54グリッドの第IV層で確認した。

〔規模と形態〕 長径1.25m、短径1.18m、深さは0.75mで円形である。ほぼ円筒状に掘り込まれており、底面から緩やかに外傾しながら開いている。

〔底面〕 長径1.04m、短径0.90mの楕円形である。底面は平坦であるが、ほぼ中央部に径0.35×0.32m、深さ0.25mの柱穴状の円形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 1層は現代の攪乱である。2・3層は堆積状況から自然堆積と判断した。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。

#### SKT17陥し穴（第6図）

〔位置と確認〕 LM54グリッドの第IV層で確認した。

〔規模と形態〕 長径0.97m、短径0.91m、深さは0.64mで略円形である。ほぼ円筒状に掘り込まれており、底面からほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 長径0.80m、短径0.76mの略円形である。底面は平坦であるが、ほぼ中央部に径0.33×0.29m、深さ0.23mの柱穴状の方形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 1・2層は現代の攪乱である。3層の観察から自然堆積と判断した。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。

#### SKT19陥し穴（第6図）

〔位置と確認〕 LT52グリッドの第III層で確認した。

〔規模と形態〕 長径1.00m、短径0.98m、深さは0.24mで円形である。

〔底面〕 底径0.92mの円形である。底面は平坦であるが、中央より北東側に0.47×0.43mの楕円形の掘り込みがあった。

〔堆積土〕 本遺構壁面の地山崩落土を含む自然堆積土である。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。

#### SKT20陥し穴（第6図）

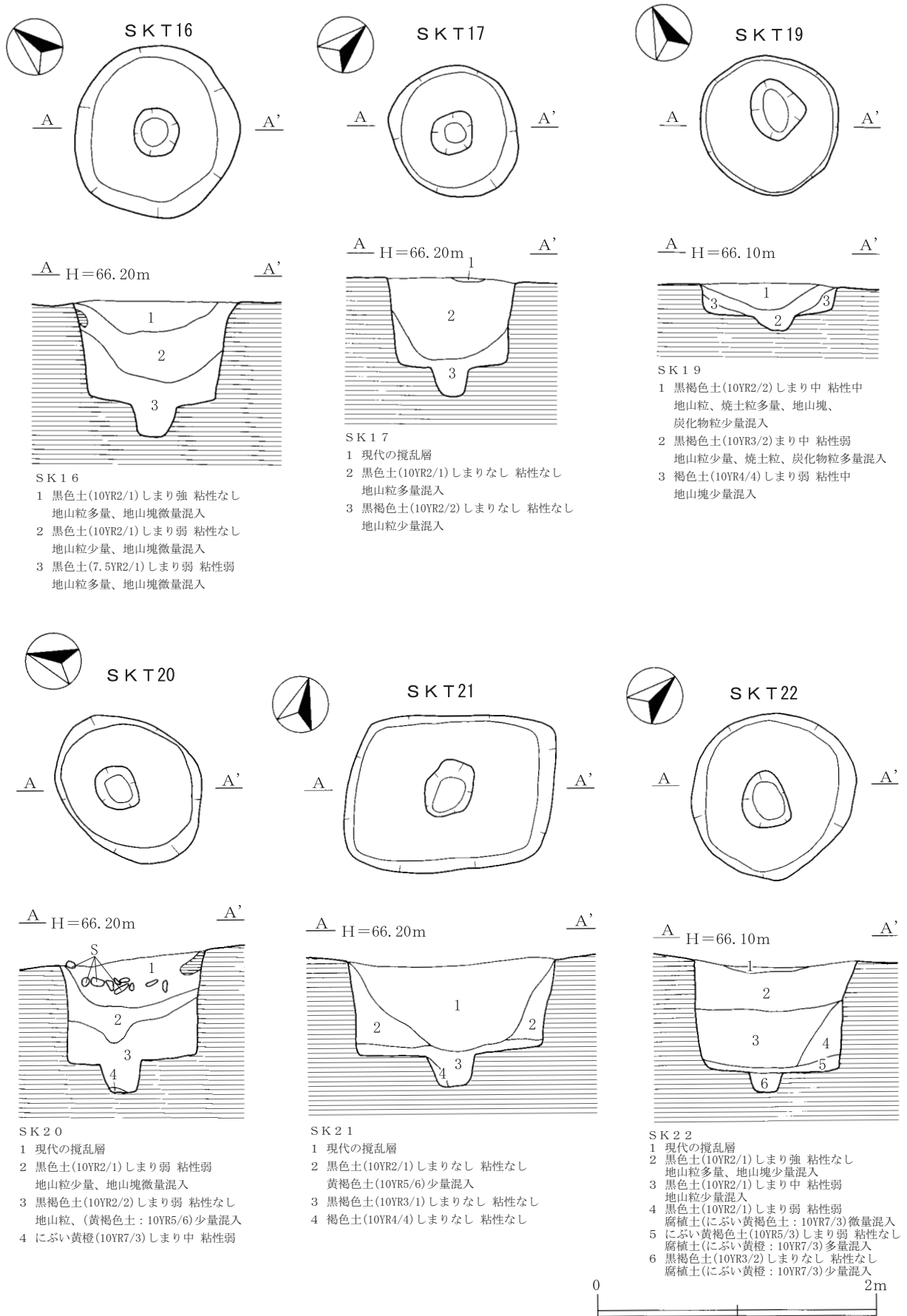
〔位置と確認〕 LK54・55グリッドの第IV層で確認した。

〔規模と形態〕 長径1.18m、短径0.94m、深さは0.73mで楕円形である。ほぼ筒状に掘り込まれており、底面からほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 長径0.98m、短径0.88mの楕円形である。底面は平坦であるが、ほぼ中央部に径0.33×0.28m、深さ0.21mの柱穴状の方形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 1層は現代の攪乱である。2・3層は堆積状況から自然堆積と判断した。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。



第6図 検出遺構(陥し穴)

**SKT21陥し穴（第6図）**

〔位置と確認〕 LT55グリッドの第IV層で確認した。

〔規模と形態〕 長径1.52m、短径1.14m、深さは0.65mで隅丸長方形である。ほぼ筒状に掘り込まれており、底面からほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 長径1.34m、短径0.98mの楕円形である。底面は平坦であるが、ほぼ中央部に径0.44×0.34m、深さ0.25mの柱穴状の楕円形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 1層は現代の攪乱で、2・3層を掘り込んでいる。2～4層は腐植土の自然堆積である。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。

**SKT22陥し穴（第6図）**

〔位置と確認〕 LT54・55グリッドの第IV層で確認した。

〔規模と形態〕 長径1.20m、短径1.15m、深さは0.65mで不整な円形である。ほぼ円筒状に掘り込まれており、底面からほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 長径1.06m、短径0.98mの楕円形である。底面は平坦であるが、ほぼ中央部に径0.41×0.33m、深さ0.21mの柱穴状の楕円形ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 1・2層は現代の攪乱である。4～6層は腐植土の自然堆積と判断した。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代に相当と考えられる。

**SKT23陥し穴（第7図）**

〔位置と確認〕 LH・LI56グリッドの第III層で確認した。本遺構北側は調査区外に伸びているため調査できなかった。

〔規模と形態〕 推定で長径1.40m、短径1.00mの楕円形を呈する。深さは0.45mである。

〔底面〕 推定で長径1.25m、短径0.95mの楕円形を呈するものと思われる底面は中央部に向かって緩やかに傾斜しており、中央よりやや北東側に推定で0.55×0.40mの楕円形を呈すると思われる掘り込みがあった。

〔堆積土〕 腐植土の堆積状況から自然堆積と判断した。

〔時期〕 形状、位置から、縄文時代と考えられる。

**SKT25陥し穴（第7図）**

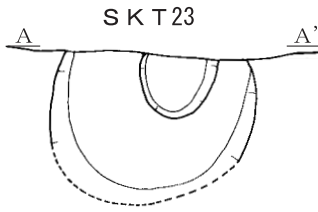
〔位置と確認〕 LN・LO55・56グリッドの第IV層で確認した。

〔規模と形態〕 長さ3.34m、幅0.21m、深さは0.78mで溝形である。北西壁はほぼ垂直に、南東壁は緩やかに立ち上がる。

〔底面〕 長さ3.15m、幅0.05mの楕円形である。底面はやや凸凹している。

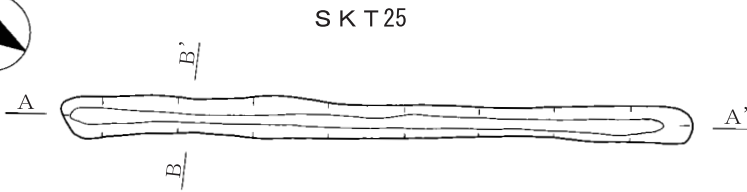
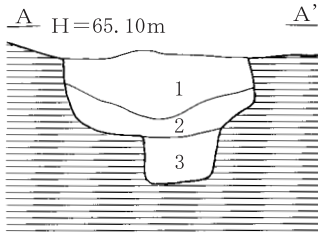
〔堆積土〕 レンズ状の堆積状況から自然堆積と判断した。

〔時期〕 唯一溝状で出土遺物がないため明確な時代決定はできないが、概ね縄文時代と考えられる。

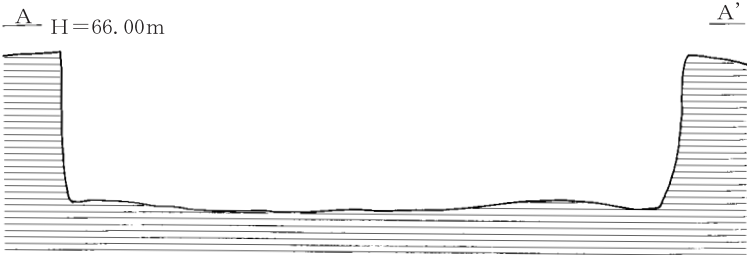
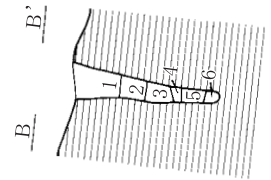


SKT23

- 1 黒色土(10YR2/1)しまりなし 粘性弱  
地山粒少量混入
- 2 黒色土(10YR2/1)しまり弱 粘性弱  
地山粒・塊少量混入
- 3 黒色土(10YR2/1)しまりなし 粘性なし  
地山粒多量混入



SKT25



SKT25

- 1 黒色土(10YR1.7/1)しまり強 粘性弱  
地山粒少量混入
- 2 黒色土(10YR2/1)しまり中 粘性弱  
地山塊微量混入
- 3 黒色土(10YR2/1)しまり中 粘性弱  
地山土塊多量混入
- 4 にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまり中 粘性弱  
地山塊、黒色土粒少量混入
- 5 黒褐色土(10YR3/1)しまり中 粘性中  
地山粒少量混入
- 6 明黄褐色土(10YR6/6)しまり強 粘性中  
黒褐色土(10YR3/1)少量混入



第7図 検出遺構(陥し穴)



## 2 古 代

検出した古代の遺構は、竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基の計2遺構である。

### (1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区中央部のやや南西の平坦部から1軒検出した。

#### S I 03竪穴住居跡（第9図）

〔位置と確認〕 LT47・48、MA47・48グリッドの第Ⅲ層で確認した。また南東辺の北東側に白色粘土が露出しており、カマドの存在が推定出来た。なお同じく南東辺に平行する様に長方形プランが確認されたが、この段階では重複関係にあるか本遺構に伴うものかは不明だった。北東辺、北西辺は試掘の影響を受けている。

〔重複〕 南東辺に平行する長方形プランは後に竪穴状遺構SK I 02とするが、土層観察により、本遺構は竪穴状遺構SK I 02を掘り込んで構築されていると判断した。

〔規模と形態〕 北東－南西長4.40m、北西－南東長4.56mで平面形は方形を呈す。主軸方位はN－55.5°－Wである。

〔床面〕 第Ⅲ・Ⅳ層を掘り込み、その上に黒褐色土に地山塊を混ぜ、平坦に硬化させた貼床を構築している。床面積は17.5㎡。

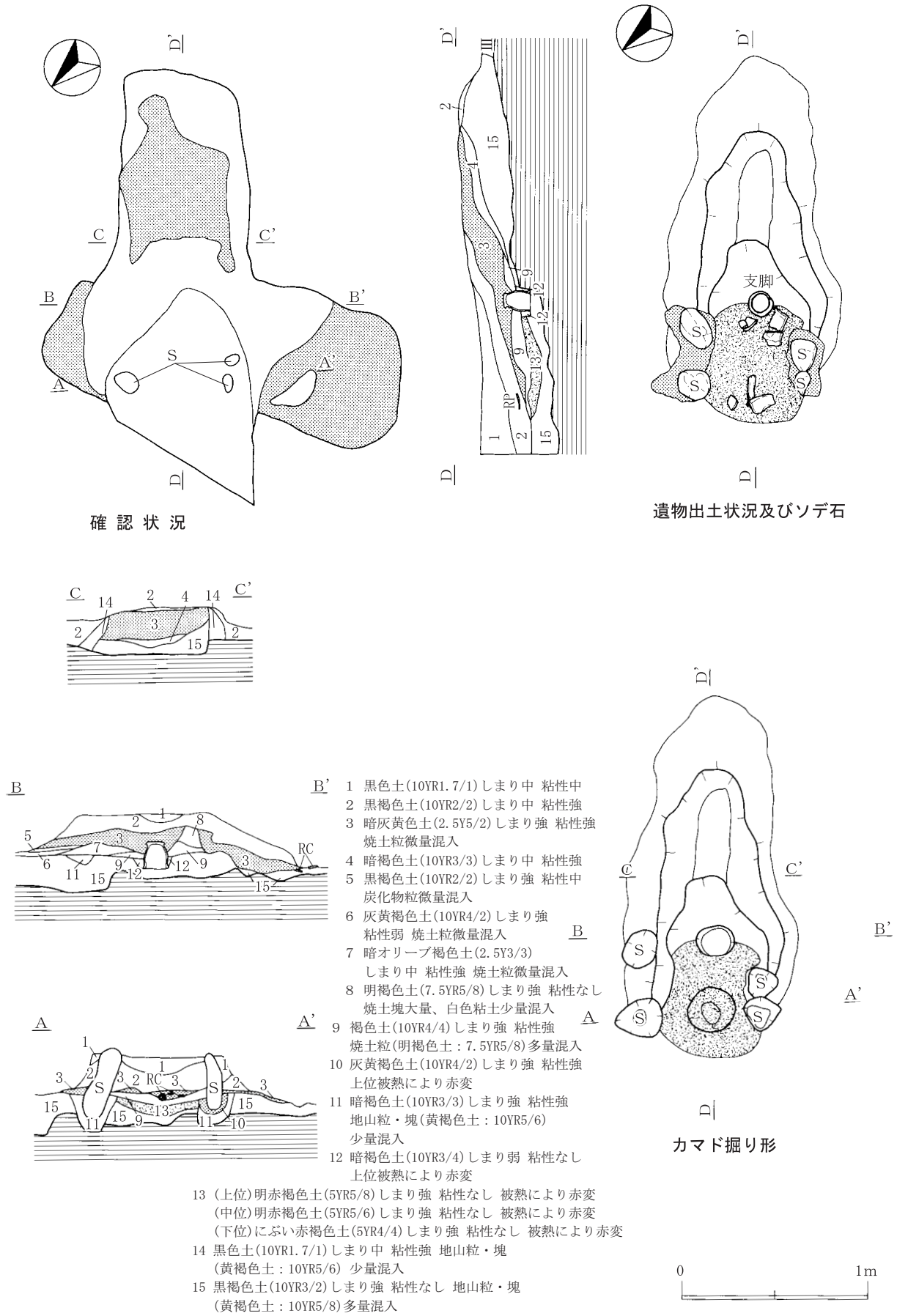
〔堆積土〕 1層は現代溝堆積土、2層は根による攪乱、3～11層は腐植土のレンズ状堆積状況から自然堆積土、12層は黒褐色土に地山塊を混ぜ平坦に硬化させた貼床、13層は壁溝に立てた板材の腐植土と判断した。なお14～15層は前出の竪穴状遺構SK I 02の覆土である。

〔壁〕 四辺は、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁長は北東辺4.56m、北西辺4.46m、南東辺4.42m、南西辺4.68m。確認面からの壁高は0.14～0.24m程である。また北東辺中央部、南東辺北東端寄りの二箇所において幅0.23～0.25m、厚さ0.03m程の板材痕と見られる凹みを確認した。

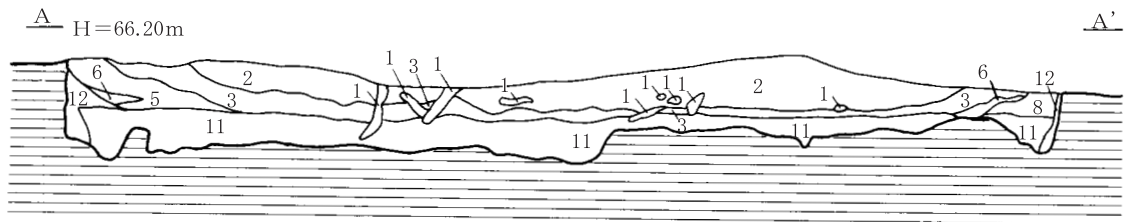
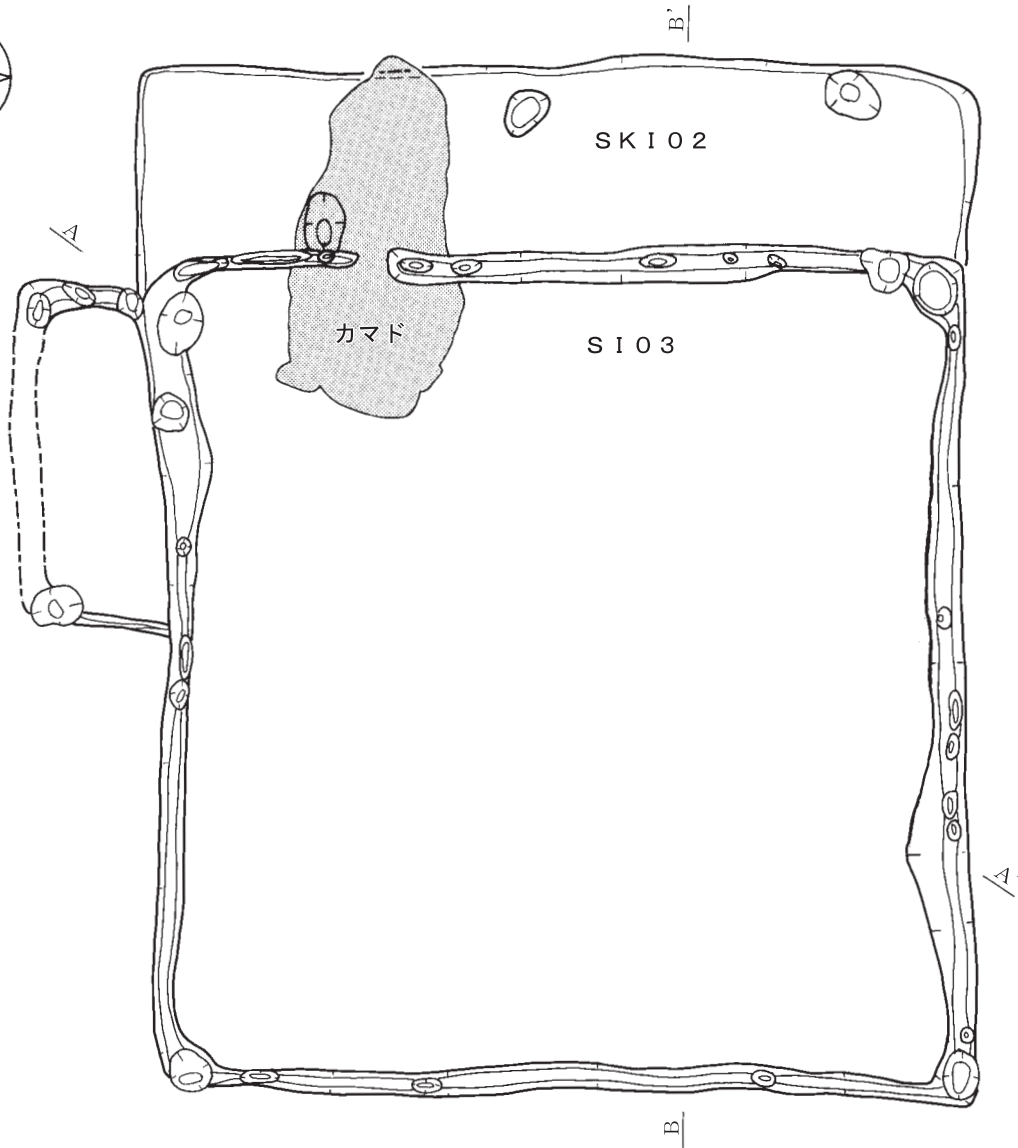
〔壁溝・柱穴〕 壁溝は南東辺のカマド付近の一部を除き巡っている。溝の幅は0.07～0.34m、床面からの深さは0.09～0.33mである。柱穴は各壁際にP 1～6、後述の張り出し部にP 7～9を見ることが出来る（第2表・柱穴観察表参照）。

〔カマド〕（第8図）南東辺の北東寄りに構築されており、煙道先端部は削平の影響を受け消失していた。カマドの中軸線はN－50.5°－Wで南東辺に直交せず、若干南側に振れている。全長1.53m以上（燃焼部長0.64m、煙道長0.89m以上）、燃焼部幅は0.53mである。燃焼部奥のほぼ中央には完形の土師器小甕を倒立させて設置し、白色粘土・暗褐色土に地山塊を混ぜた土で固定し支脚としている。袖部は四個の石を芯材とし、床面を掘り込み、白色粘土と暗褐色土に地山塊を混ぜた土で固定している。石の一部は火熱の影響を受け脆くなっていた。煙道は本遺構より古い竪穴状遺構SK I 02に黒褐色土に地山塊を混ぜた土を幅0.20～0.68mの溝状に盛り、上り勾配16.6°で構築されている。煙出しに相当するものは削平の影響を受けていたため、確認出来なかった。燃焼部から煙道まではほぼ全体的に白色粘土で覆われていることから、それをもって天井部を架構していたものと考えられる。

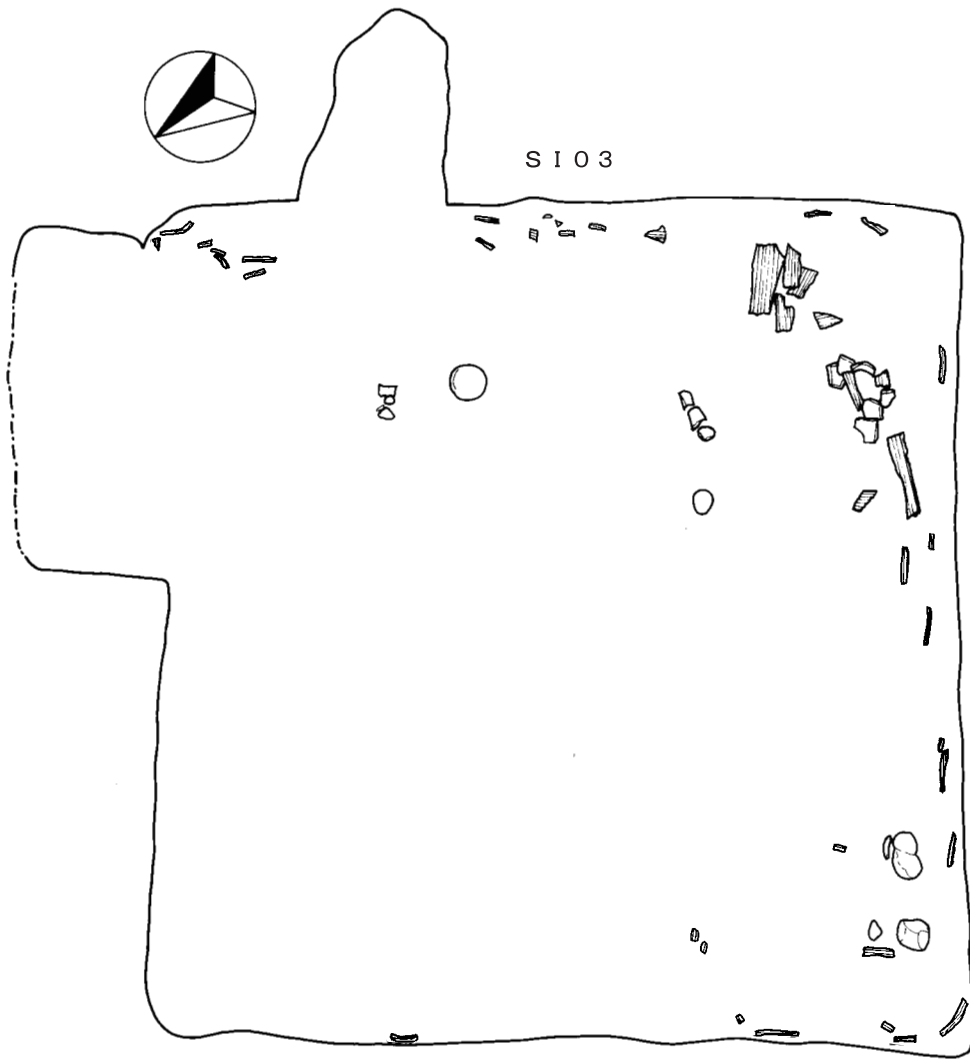
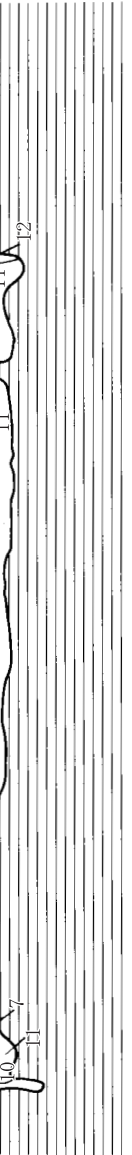




第8図 S I 03竪穴住居跡・カマド



第9図 SI



SKI02・S I 0 3 (A-A'・B-B')

- |   |  |
|---|--|
| <p>1 黒色土 (10YR1.7/1) しまり弱 粘性なし<br/>                 2 黒色土 (10YR1.7/1) しまり中 粘性中<br/>                 3 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性強<br/>                 4 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中 粘性中<br/>                 地山粒 (黄褐色土: 10YR5/8) 微量混入<br/>                 5 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中<br/>                 地山粒 (黄褐色土: 10YR5/8) 微量、炭化物塊混入<br/>                 6 黒色土 (10YR2/1) しまり中 粘性弱<br/>                 焼土粒 (褐色土: 7.5YR4/6)、炭化物粒微量混入<br/>                 7 黒色土 (10YR2/1) しまり中 粘性中<br/>                 地山粒 (明黄褐色土10YR6/8) 微量混入</p> | <p>8 黒色土 (10YR2/1) しまり強 粘性弱<br/>                 地山塊 (明黄褐色土10YR6/6) 微量混入<br/>                 9 褐色土 (7.5YR4/6) しまり中 粘性強<br/>                 焼土粒 (褐色土7.5YR4/6)、炭化物粒微量混入<br/>                 10 黒色土 (10YR1.7/1) しまり中 粘性強<br/>                 11 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強 粘性なし<br/>                 地山粒・塊 (黄褐色土: 10YR5/8) 多量混入<br/>                 12 黒色土 (10YR2/1) しまり弱 粘性中<br/>                 地山粒 (黄褐色土: 10YR5/8) 微量混入<br/>                 13 黒色土 (10YR2/1) しまり強 粘性なし<br/>                 14 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中 粘性中<br/>                 地山粒 (黄褐色土: 10YR5/8) 微量混入</p> |
|---|--|



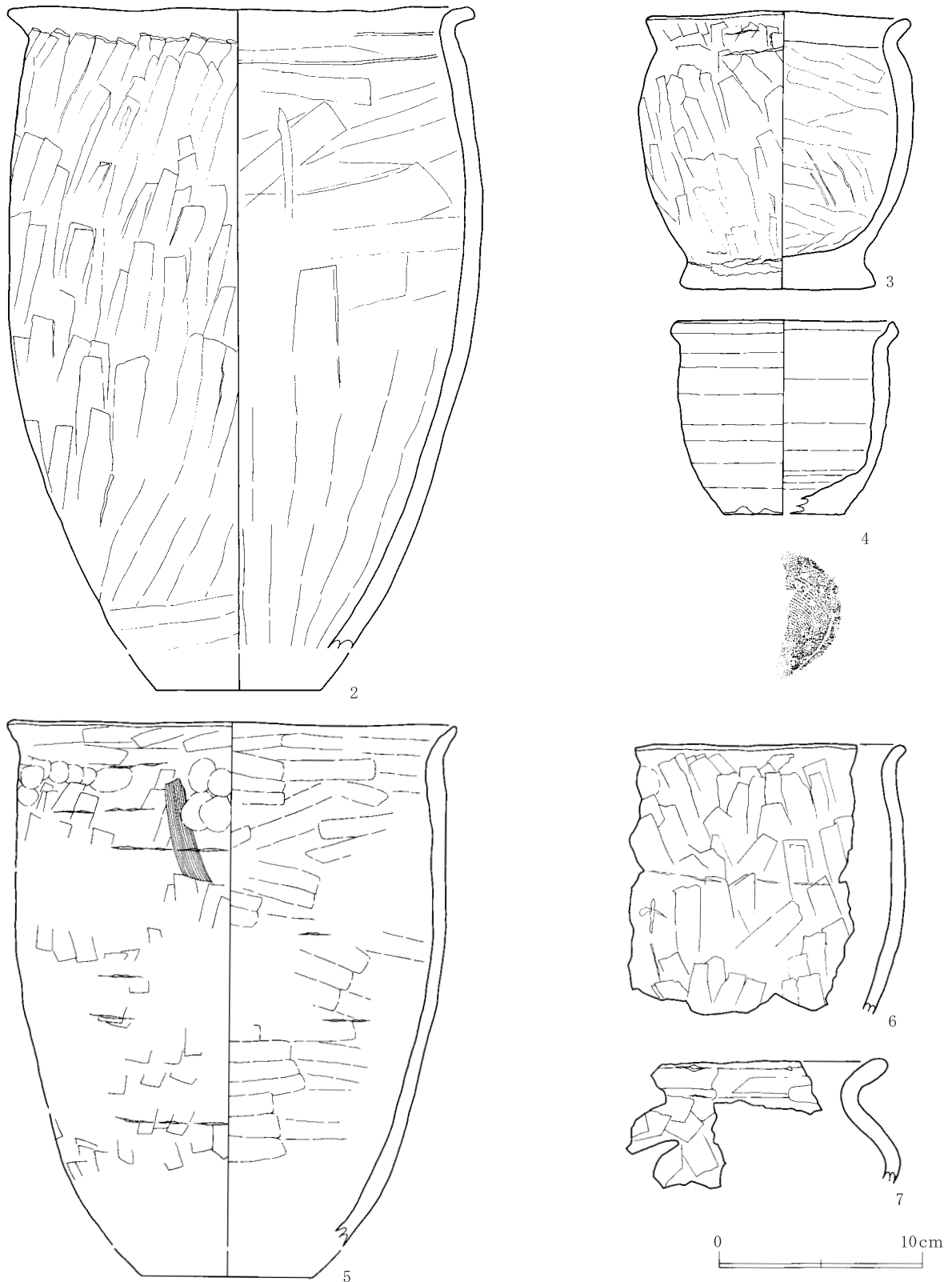
よって煙道は粘土が変色したカマド4・9層と15層に挟まれた間と見ることが出来る。燃焼部付近の崩落白色粘土に混じり、土師器・須恵器片が出土したことにより、廃絶に伴いこれらが捨てられたことが考えられる。なお焚口部出土の炭化材は同定の結果、薪炭などに用いられるトネリコ属であることが明らかとなった。

〔 付属施設 〕 北東辺の南東端部に幅1.86m、奥行き約0.80mと推定される張り出し部があり、三隅に柱穴が見られることから、上屋を伴う出入り施設と考えられる。この床面積は推定約0.98㎡で、貼床の存在は試掘の影響を受けていたため、不明である。

〔 出土遺物 〕 (第10・11図) 貼床直上から土師器長胴甕(2個体)、土師器小甕(8個体)、土師器内面黒色処理杯(1個体)、カマド燃焼部付近の崩落白色粘土から土師器小甕(4個体)、須恵器小甕(2個体)が出土した。また試掘の影響を受けていない南東辺・北東辺の各壁際の貼床直上から、炭化した板材・角材・木片が出土しており、その大半の木目方向は各辺に平行している。なおこの板

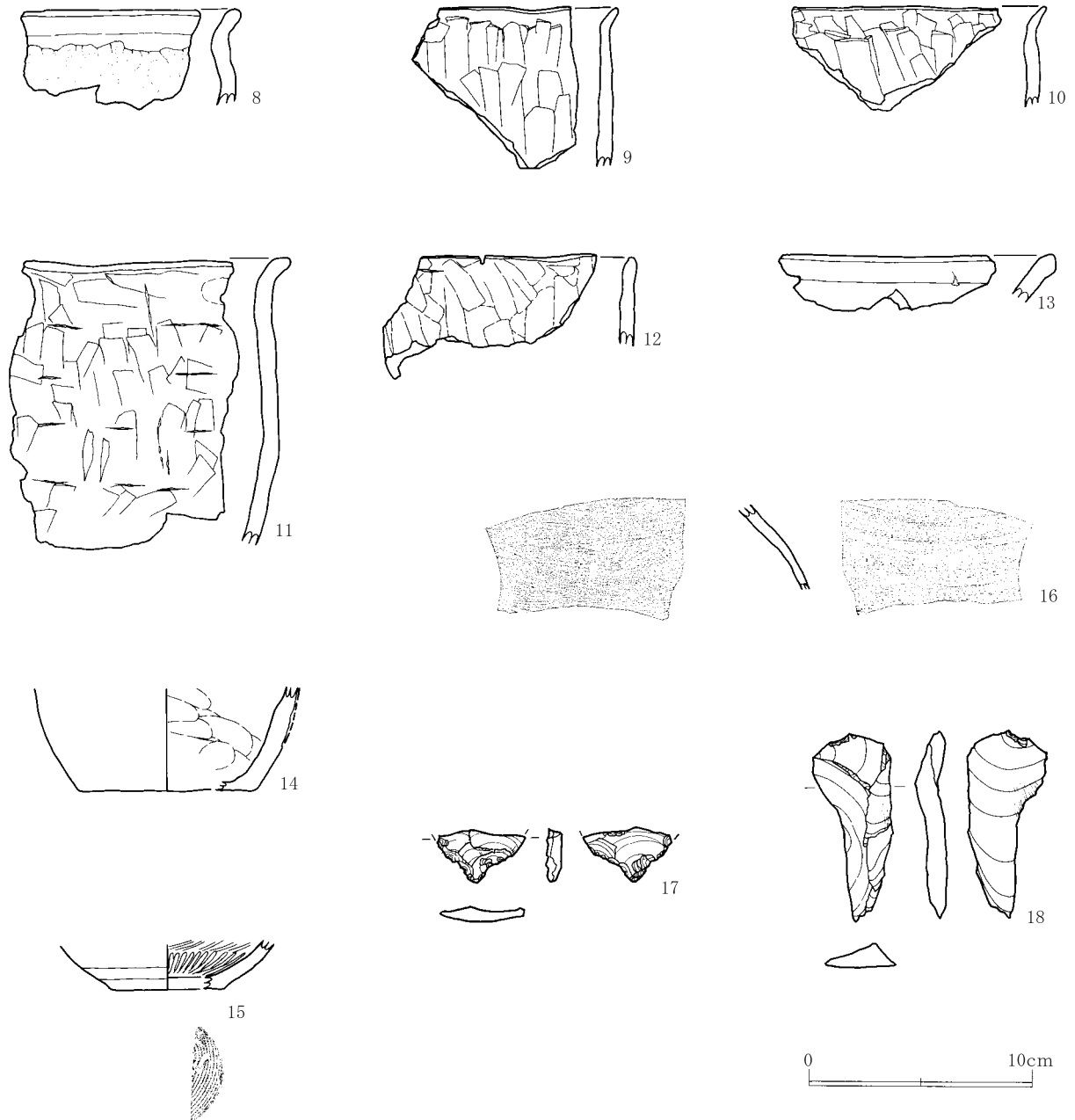
第2表 S I 03関連柱穴様ピット一覧

柱穴番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	楕円形	2 6	2 2	5 6
P 2	円 形	2 2	2 2	5 7
P 3	楕円形	3 5	2 3	6 3
P 4	不整形	2 9	2 4	6 3
P 5	楕円形	3 1	2 2	8 2
P 6	楕円形	2 7	1 8	4 9
P 7	楕円形	2 9	2 2	3 9
P 8	楕円形	1 9	1 2	3 7
P 9	楕円形	1 8	1 4	4 8



挿図番号	図版番号	出土地区	器種	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	外面調整	内面調整	底部切り離し
10-2	5-2	S 103 D区	土師器甕	222	(82)	(34)	タテケズリ	ヨコナデ	
10-3	5-3	S 103 カマド支脚	土師器甕	125	97	136	タテナデ	ヨコナデ	
10-4	5-4	S 103B区貼床直上	土師器甕	106	60	95	ロクロ成形	ナデ	回転糸切り
10-5	5-5	S 103カマド	土師器甕	217	(83)	(27)	タテナデ	ヨコナデ	
10-6	5-6	S 103カマド	土師器甕	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	
10-7	5-7	S 103D区	土師器甕	-	-	-	タテナデ		

第10図 遺構内出土遺物



挿図番号	図版番号	出土地区	器種	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	外面調整	内面調整	底部切り離し
11-8	6-8	S I 03C区貼床直上	土師器甕	-	-	-	タテナデ	ヨコナデ	
11-9	6-9	S I 03A区貼床直上	土師器甕	-	-	-	タテナデ	指なで	
11-10	6-10	S I 03B区貼床直上	土師器甕	-	-	-	タテナデ	ヨコナデ	
11-11	6-11	S I 03D区C区	土師器甕	-	-	-	タテナデ	ヨコナデ	
11-12	6-12	S I 03A区貼床直上 IV層	土師器甕	-	-	-	タテナデ		
11-13	6-13	SK29S I 03D区	土師器甕	-	78	(47)	ヨコナデ	ヨコナデ	
11-14	6-14	S I 03C区	土師器甕	-	50	(20)			
11-15	6-15	S I 03D区	土師器坏	-	-	-		黒色処理・ヘラミガキ	回転系切り
11-16	6-16	S I 03カマド	須恵器壺	-	-	-		ケズリ	ナデ

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
11-17	6-17	SI03C区	石錐	24	39	7	4.5
11-18	6-18	SKI02	剥片	84	36	14	17.2

第11図 遺構内出土遺物

材は同定の結果、建築材に用いられる杉であることが明らかとなった。

〔時期〕 土師器や須恵器などの出土遺物から10世紀後半に属するものと判断した。

(2) 竪穴状遺構 (SK I)

竪穴状遺構は調査区中央部のやや南西の平坦部から1基検出した。

SK I 02竪穴状遺構 (第9図)

〔位置と確認〕 LT47・48、MA47グリッドの第Ⅲ層で長方形プランを確認した。本遺構の北西の長辺と平行する様に竪穴住居跡S I 03の南東辺があり、この段階では重複関係にあるか否かは不明であった。

〔重複〕 土層観察により、本遺構は竪穴住居跡S I 03に掘り込まれていると判断した。また北東辺は現代の溝に一部切られている。

〔規模と形態〕 北西—南東長4.52m、北東—南西長は竪穴住居跡S I 03に切られているため、1.04m以上と推定する。検出した平面形は長方形を呈す。主軸方位はN-35°-Eである。

〔床面〕 第Ⅲ・Ⅳ層を掘り込み、凹凸が著しい。

〔堆積土〕 2層は根による攪乱、14・15層は腐植土の堆積状況から自然堆積土と判断した。

〔壁〕 三辺はほぼ垂直に立ち上がっている。残りの北西辺は竪穴住居跡S I 03に切り込まれているため、消失している。壁長は南東4.56m、北東壁・南東壁は竪穴住居跡S I 03に切られているため、一部消失しており、それぞれ1.24m、1.04m以上と推定する。確認面からの壁高は0.09～0.16m程である。

〔壁溝・柱穴〕 壁溝は検出されなかった。柱穴は南東壁の南西端寄りにP1、中央部にP2、竪穴住居跡S I 03に切られている線上の北東寄りにP3を見ることが出来る (第2表 柱穴観察表参照)。

〔出土遺物〕 根による攪乱土中より、縄文時代の石器剥片1点 (第11図) が出土した。

〔時期〕 形状から古代に属するものと判断した。

第3表 SK I 02関連柱穴様ピット一覧

柱穴番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	楕円形	3 1	2 4	2 2
P 2	楕円形	2 7	1 7	1 9
P 3	楕円形	3 1	2 1	3 1

3 近 世

検出した近世の遺構は、井戸跡1基である。井戸跡（SE）は、B区のほぼ中央部から検出された。

SE01井戸跡（第12図）

〔位置と確認〕 L J 40グリッドの第IV層で確認した。既に試掘の影響を受けて地山面が露出しており、本来の確認面がそれか或いはそれより上層かは判然としない。また試掘の際に1/4載されていた。

〔重複〕 重複関係はない。

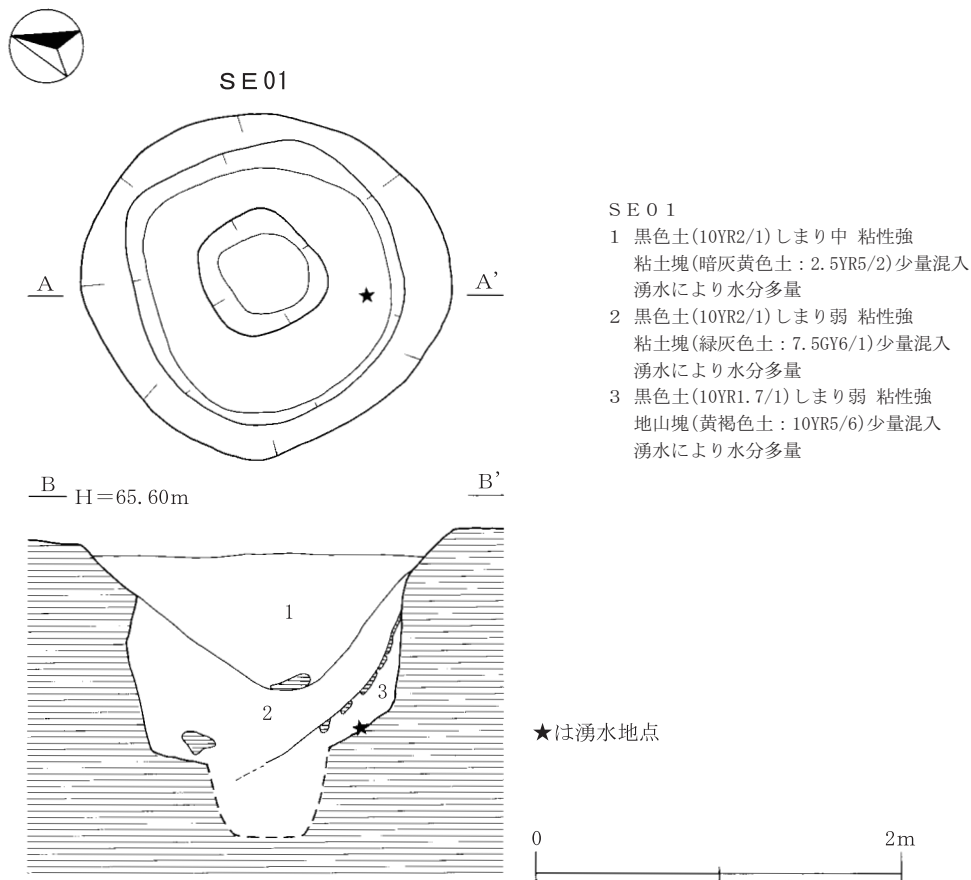
〔規模と形態〕 長径2.04m、短径1.88m、深さは約1.70mの歪な漏斗状で平面形は円形を呈す。湧水点は確認面から約1.10m下がった壁際にある。

〔堆積土〕 湧水の影響により全体的に水分を多量に含み、底部に迫る程それが著しく、土層の状況は不明瞭であった。本遺構壁面の地山崩落土を含む腐植土のレンズ状堆積状況から自然堆積土と判断した。

〔井戸側〕 木枠などの構築材は出土しなかった。

〔出土遺物〕 1・2層より木材・枝が数点、近世に属する陶磁器片4点、砥石片1点、礫4点が出土した。遺物の出土状況や堆積土の状況を踏まえると、これらは自然の流れ込みによって本遺構内に入ったものと判断した。

〔時期〕 遺物と出土状況から、近世に属するものと判断した。



第12図 検出遺構(井戸跡)



第3節 遺構外出土遺物

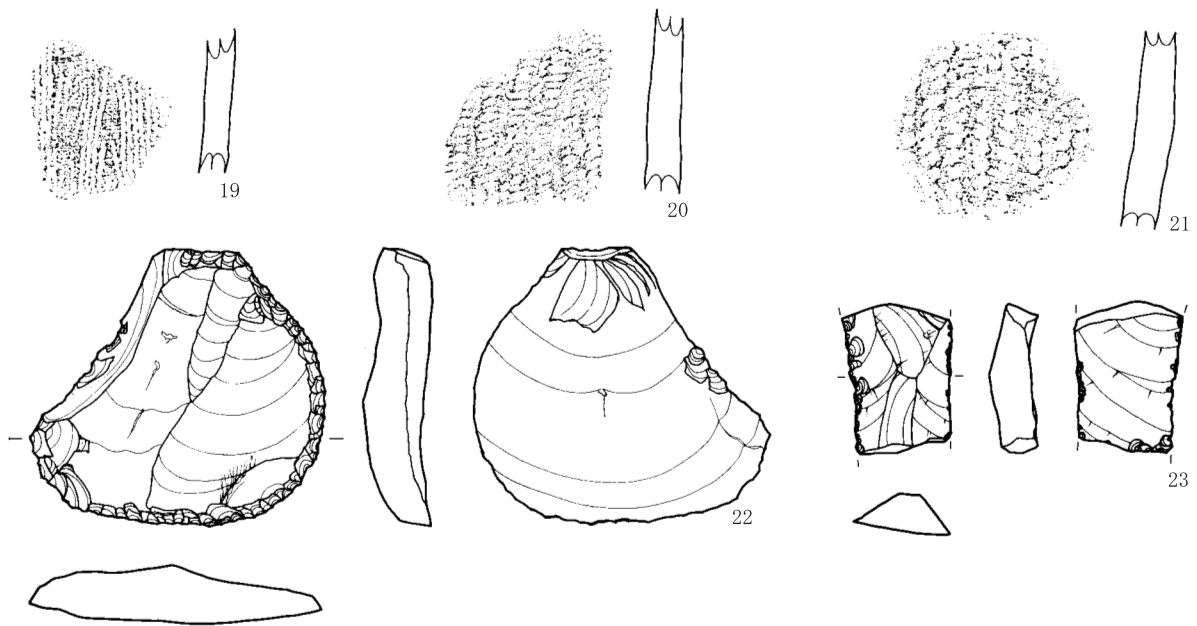
今回の発掘調査では、縄文時代と平安時代に使用された土器と石器、剥片の出土があった。A区・B区ともに遺構外からの遺物の出土は極めて少なかった（第13図）。

1 土器

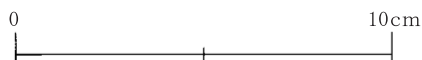
出土した土器片を見ると円筒下層d式に相当する土器片が18点あり、その出土位置は、I層からIV層まで様々で、近年の土地改良等がその要因と考えられる。土器片を観察すると、縄文を縦位に施文しているものがほとんどであった。胎土には少量の細砂粒を含んでおり、その焼成は、全般的に良好である。内面は平滑であるが、やや凹凸があつて粗雑なものもあった。出土した土器片は、全て小破片であり、これらから全体の器形を判断することはできなかった。

2 石器

出土した石器は、スクレイパー2点、剥片20点の計22点である。このうちスクレイパーの1つ（第13図22）には、片面に剥離調整が施されていた。この他に両端が破断しておりその器形全体が分からないものの、両側刃部に調整を施したものが1点（第13図23）出土した。



挿図番号	図版番号	出土地区	器種	文様
13-19	6-19	L T 52 II層	縄文土器	木目状撚糸文
13-20	6-20	L O 52	縄文土器	斜縄文
13-21	6-21	MC 46 III層	縄文土器	斜縄文



挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
13-22	6-22	排土	スクレイパー	73	78	19	92.2
13-23	6-23	LQ50 III層	スクレイパー	(39)	29	13	13.4

第13図 遺構外出土遺物

## 第5章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

### 第1節 花粉分析

#### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

#### 2. 試料

分析試料は、S K08地点の覆土2層底部の黒褐色土（試料番号27）、S K12地点の6層覆土下位の褐色土（試料番号32）の2点である。

#### 3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

#### 4. 結果

##### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉8、シダ植物孢子2形態の計23である。これらの学名と和名および粒数を第4表に示し、花粉数が100個以上計数できた試料は、花粉総数および樹木花粉数を基数とする花粉ダイアグラムを第14図に示す。主要な分類群は

写真(図版7-1)に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが、検出されなかった。

以下に出現した分類群を記す。

- [樹木花粉] スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、クリ、シイ属  
コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ  
[樹木花粉と草本花粉を含むもの] クワ科-イラクサ科、マメ科  
[草本花粉] イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科  
ツリフネソウ属、タンポポ科、ヨモギ属  
[シダ植物孢子] 単条溝孢子、二条溝孢子

## (2) 花粉群集の特徴

### 1) SK08地点、覆土2層底部

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、花粉密度はやや低い。草本花粉ではイネ科を主に、ツリフネソウ属、ヨモギ属、タンポポ科が伴われ、マメ科、クワ科-イラクサ科もやや高率に出現する。樹木花粉では、ハンノキ属の優占で特徴づけられ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、スギが伴われる。

### 2) SK12地点、6層覆土下位

花粉がほとんど検出されない。

## 5. 花粉分析から推定される植生と環境

### (1) SK08地点、覆土2層底部

イネ科を主に、ツリフネソウ属、ヨモギ属、タンポポ科、マメ科、クワ科-イラクサ科などの草本の分布が示唆される。イネ科、ヨモギ属、タンポポ科、マメ科、クワ科-イラクサ科は人為環境に多い草本であることから、周囲には人為地が分布していたと推定される。ツリフネソウ属は谷沿いなどの適潤地に生育し、ハンノキ属は生態上から湿地生のハンノキが考えられる。こうしたことから、近接してツリフネソウ属とハンノキ湿地林が分布し、谷沿いなどの湿地ないし適潤地が分布しており、周辺地域には、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林を主に、コナラ属アカガシ亜属とシイ属の照葉樹林、スギ林が分布していたと推定される。

### (2) SK12地点、6層覆土下位

花粉がほとんど検出されず、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境が示唆される。

## 6. まとめ

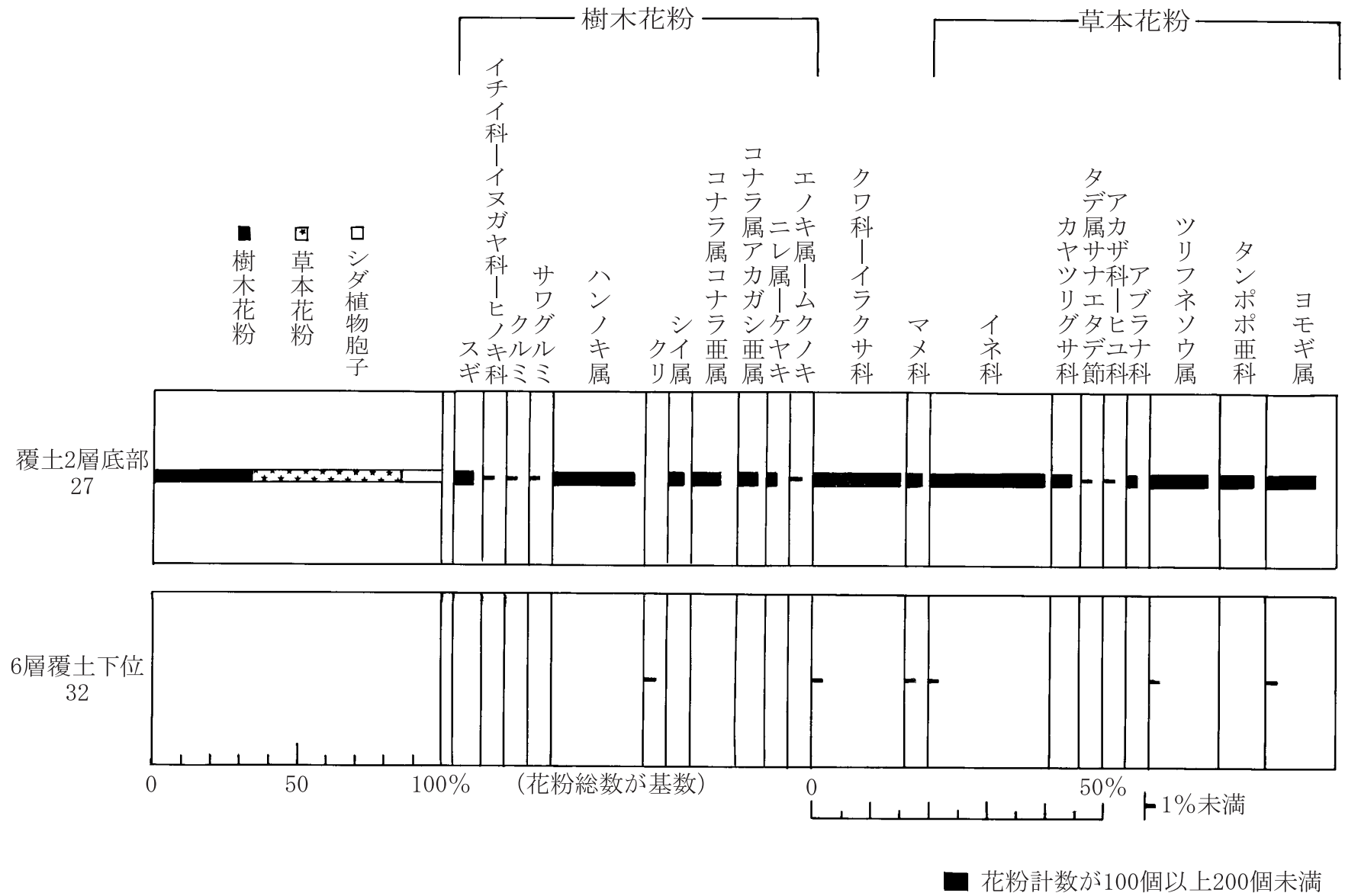
SK08地点覆土2層底部では、イネ科を主にヨモギ属、タンポポ科、クワ科-イラクサ科が生育し、人為環境が分布し、周囲に近接してツリフネソウ属とハンノキ湿地林の分布が示唆された。SK12地点6層覆土下位では花粉がほとんど検出されず、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境が示唆された。

## 参考文献

- 中村 純(1973)花粉分析. 古今書院, p.82-110.  
金原 正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.  
島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.

第4表 花粉分析結果

分類群		SK08	SK12
学名	和名	27	32
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	4	
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae</i>	イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科	1	
<i>Juglans</i>	クルミ属	1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	1	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	17	
<i>Castanea crenata</i>	クリ		1
<i>Castanopsis</i>	シイ属	3	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	6	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属 - ケヤキ	2	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属 - ムクノキ	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科	18	3
Leguminosae	マメ科	3	1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	24	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科	1	
Cruciferae	アブラナ科	2	
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	12	2
Lactuicoideae	タンポポ科	7	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	10	1
Fern spore	シダ植物孢子		
Monolate type spore	単条溝孢子	13	3
Trilate type spore	三条溝孢子	4	
Arboreal pollen	樹木花粉	40	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	21	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	61	4
Total pollen	花粉総数	122	9
Unknown pollen	未同定花粉	5	0
Fern spore	シダ植物孢子	17	3
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)



第14図 SK08地点及びSK12地点における花粉ダイアグラム

中村 純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録 第13集, 91p.

中村 純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村 純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

## 第2節 樹種同定

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

### 2. 試料

試料は、S I 03より出土した壁板材RCとカマド焚口RCの炭化材2点である。

### 3. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4. 結果

結果を第6表に、顕微鏡写真を図版7-2に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものが多い。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

横断面：年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～2列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

### 5. 所見

同定の結果、S I 03より出土した壁板材RCとカマド焚口の炭化材はスギとトネリコ属であった。ス

ギは針葉樹材で板材の建築材に用いられる。トネリコ属は湿地に生息する広葉樹で中低木である。

参考文献

佐伯 浩・原田 浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 20-48.

佐伯 浩・原田 浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.

島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.

第5表 樹種同定結果

試料番号	分析試料類別	採取地点		結果 (和名/学名)
4	壁板材RC	SI03	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
18	カマド焚口RC	SI03	トネリコ属	<i>Fraxinus</i>

第3節 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO<sub>2</sub>) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。(杉山, 2000)。

2. 試料

分析試料は、S I 03のカマド焚口焼土である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1 gに対し直径約40 μmのガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10-5 g) をかけて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。



ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### 4. 分析結果

##### （1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第6表および第15図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真（図版8-3）を示す。

〔イネ科〕 ヨシ属、ススキ属型（主にススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）  
ウシクサ族B（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕 クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）  
ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕 棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

##### （2）植物珪酸体の検出状況

分析の結果、クマザサ属型が比較的多く検出され、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型なども少量検出された。なお、イネ科栽培植物（イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど）に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

#### 5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

10世紀代とされるS I 03の周辺は、クマザサ属などのササ類を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生であったと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地的な所も見られたと推定される。

クマザサ属のうちミヤコザサ節は、現在は太平洋側の積雪の比較的少ないところに生育しており、その分布域は年最高積雪の極の平均が50cm以下のところに限られている（鈴木，1978）。一方、チシマザサ節やチマキザサ節は、日本海側の寒冷地などに広く分布しており、積雪に対する適応性が高いとされている（室井，1960）。ここでは後者が優勢であることから、当時は積雪が比較的多かった可能性が考えられる。

#### 文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p. 70-83.
- 杉山真二（1999）過去約3万年間におけるササ類の植生変遷と積雪量の変動－植物珪酸体分析からみた過去のミヤコザサ線－．  
日本植生史学会大会発表要旨集，p. 29-30.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p. 189-213.
- 鈴木貞雄（1978）タケ科植物の概説．日本タケ科植物総目録．学習研究社．25-45.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．  
考古学と自然科学，9，p. 15-29.
- 室井 綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告，5，p. 103-121.



第6表 植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

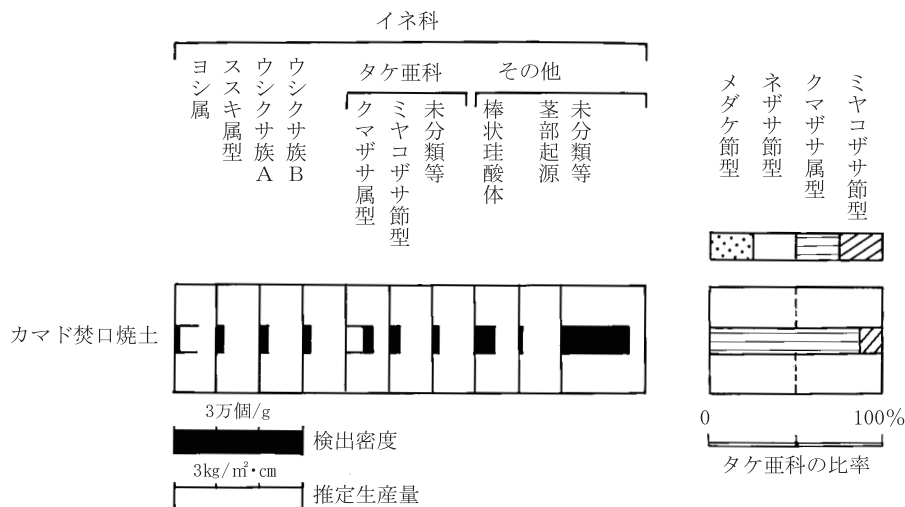
分類群	学名	地点・試料
		SI03 カマド焼土
イネ科	Gramineae(Grasses)	
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	8
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	8
ウシクサ族A	Andropogoneae Atype	15
ウシクサ族B	Andropogoneae Btype	15
タケ亜科	Bambusoideae(Bamboo)	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )	60
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	23
未分類等	Others	15
その他のイネ科	Others	
棒状珪酸体	Rod-shaped	45
茎部起源	Stemorigin	8
未分類等	Others	158
植物珪酸体総数	Total	354

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.48
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )	0.45
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.07

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )	87
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	13



第15図 SI03における植物珪酸体分析結果

## 第4節 放射性炭素年代測定結果

### 第7表 ①試料と方法

No.	試料	種類	前処理・調整	測定法
1	住居S I 03, 壁板材	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS法
2	住居S I 03, カマド焼き口	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS法
3	土坑S K 08, 覆土2層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS法
4	土坑S K 12, 覆土6層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS法

### 第7表 ②測定結果

No.	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No. (IAAA-)
1	1190±30	-25.3	1180±30	交点 : AD 890 1 $\sigma$ : AD 780~ 790 : AD 810~ 850 : AD 850~ 890 2 $\sigma$ : AD 780~ 900 : AD 920~ 960	11595
2	1090±30	-25.9	1080±30	交点 : AD 980 1 $\sigma$ : AD 900~ 920 : AD 960~ 1000 2 $\sigma$ : AD 890~ 930 : AD 940~ 1020	11596
3	6180±40	-24.0	6190±40	交点 : BC5080, 5110, 5140 : BC5180, 5210 1 $\sigma$ : BC5230~ 5220 : BC5210~ 5190 : BC5150~ 5060 2 $\sigma$ : BC5280~ 5270 : BC5260~ 5030 : BC5010~ 5000	11597
4	6110±40	-25.0	6110±40	交点 : BC5000, 5010, 5040 1 $\sigma$ : BC5190~ 5180 : BC5060~ 4940 2 $\sigma$ : BC5230~ 5230 : BC5210~ 5170 : BC5140~ 5110 : BC5100~ 5090 : BC5080~ 4910 : BC4880~ 4880 : BC4870~ 4850	11598

### 1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた。

### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration (Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 $1\sigma$ （68%確率）・ $2\sigma$ （95%確率）は、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma$ ・ $2\sigma$ 値が表記される場合もある。

## 第6章 ま と め

本遺跡の発掘調査では、国道建設予定地内の1,830㎡という限られた範囲にもかかわらず、縄文時代の陥し穴14基、平安時代の竪穴住居跡1基、竪穴状遺構1基、近世の井戸跡1基を検出した。また、遺構内外から、縄文時代、平安時代、近世の遺物が出土した。個別の遺構と遺物については、第4章で述べているので、ここでは今回の発掘調査の成果と今後の課題について考えたい。

縄文時代の遺構としては、14基検出した陥し穴がある。14基の陥し穴のうち13基は円形又は楕円形であり、その底面には逆茂木を立てたと考えられる柱穴が確認された。残りの1基は、唯一の溝状であり、台地の縁に構築されていた。これら陥し穴の時期は、科学分析や形状・類例から概ね縄文時代前期の構築であることがわかった。構築された場所は、長野沢川が形成した台地の縁に沿って円形、楕円形、溝状のものが8基列を成すようにあり、そこからやや南西側に6基ほぼ直列に検出された。このような陥し穴は、県内外での発見例はたいへん多く、形状やその規模は平均的である。これらの陥し穴からは時期を特定する土器は出土していないが、遺構外からは円筒下層d式に比定される土器が出土しており同時期の遺物である可能性がある。

平安時代の遺構としては、竪穴住居跡1軒と竪穴状遺構1基を確認した。当地域の平安時代の遺跡研究で、年代示準資料として活用されているものの1つに十和田a降下火山灰（大湯浮石層）がある。西暦915年の降灰記録に比定されるこの火山灰が、この竪穴住居跡や竪穴状遺構からは検出されなかったこと、及び遺構内から出土した土師器と須恵器の特徴からこれら平安時代の遺構の時期は10世紀後半と考えられる。土師器は、口縁部分の反りや胴部の丸みなどが10世紀後半の特徴を有している。また、この時期隆盛を誇った青森県五所川原窯跡群から持ち込まれたと考えられる薄手の須恵器（第11図16）の出土は、年代決定の根拠になるとともに、この地域が旧阿仁街道の要所として、秋田と弘前・青森を結び1,000年以上前から物資の流通が多かったことを物語っている。

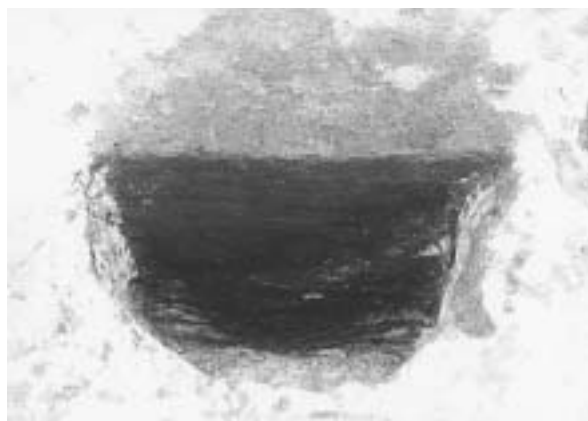
本遺跡の調査では、縄文時代前期からこの台地上で人々の営みがあり、縄文時代には狩猟場、平安時代には居住域、その後は耕作地となった土地利用の変遷がほんの一部ではあるが解明できた。



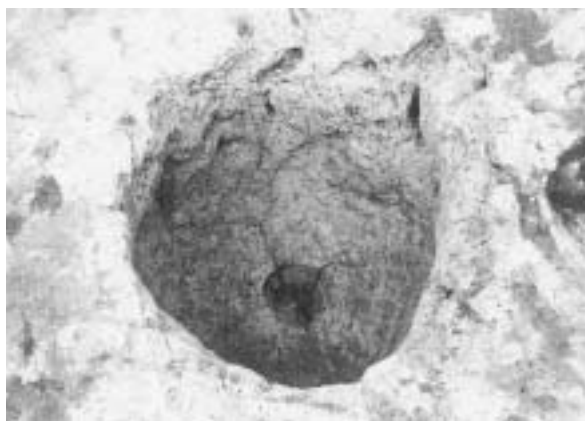


空から見た長野Ⅱ遺跡





1 SKT11断面(南西→)



2 SKT11完掘(西→)



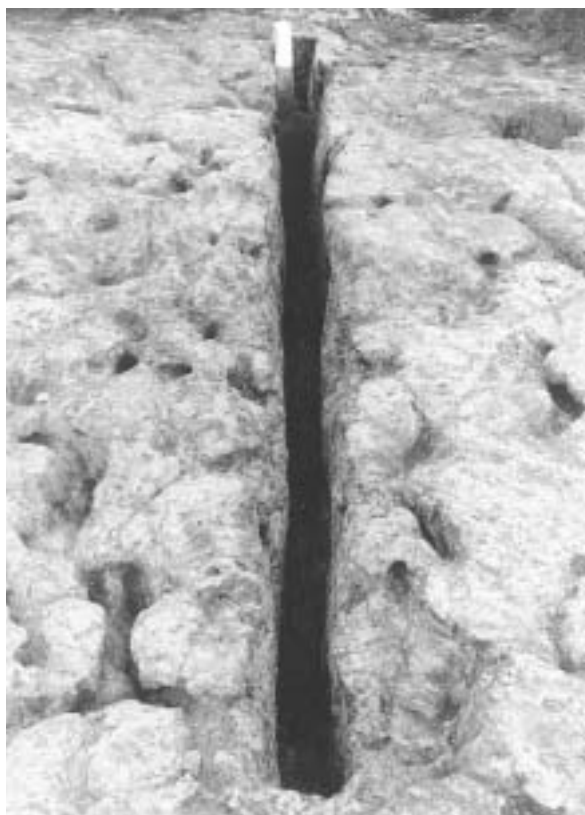
3 SKT12断面(南→)



4 SKT12完掘(南→)



5 SKT25断面(南東→)



6 SKT完掘(南東→)





1 SK I 02・SI 03確認(北西→)



2 SI 03作業風景(北西→)



3 SI 03土師器出土状況(北東→)



4 SI 03土師器出土状況(南西→)



5 SI 03壁溝内板材跡(北西→)



6 SI 03壁溝内板材跡(北東→)



7 SI 03完掘(北西→)



8 SK I 02完掘(北西→)



1 S I 03カマド確認(北西→)



2 S I 03カマド内支脚出土状況(北西→)



3 S E 01断面(東→)



4 S E 01遺物出土状況(東→)



5 S E 01完掘(東→)



6 S E 01作業風景



7 作業風景



8 作業風景



1

SKT15



2

S I 03



3

S I 03カマド支脚



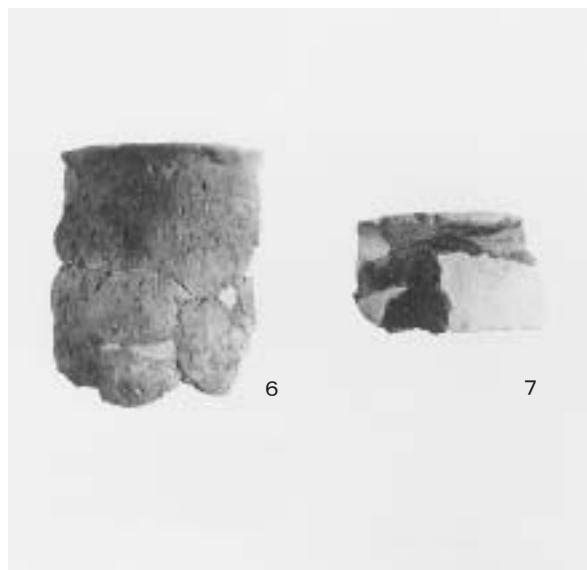
4

S I 03



5

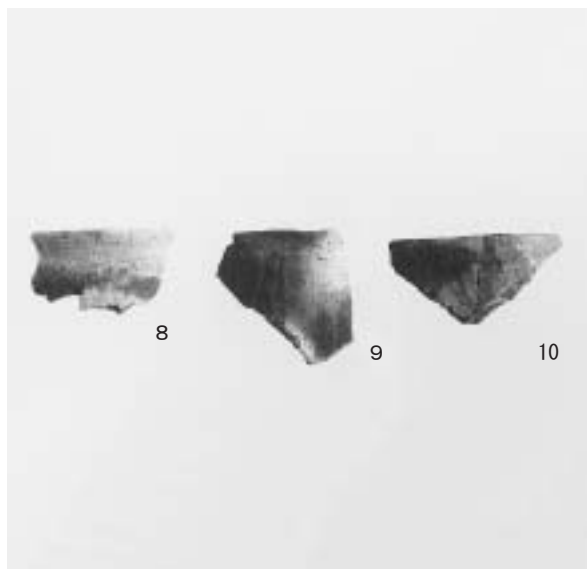
S I 03カマド



6

7

S I 03カマド



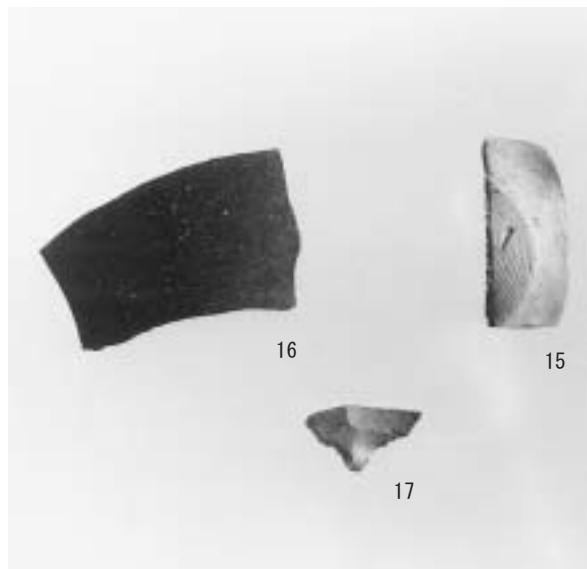
S I 03



S I 03



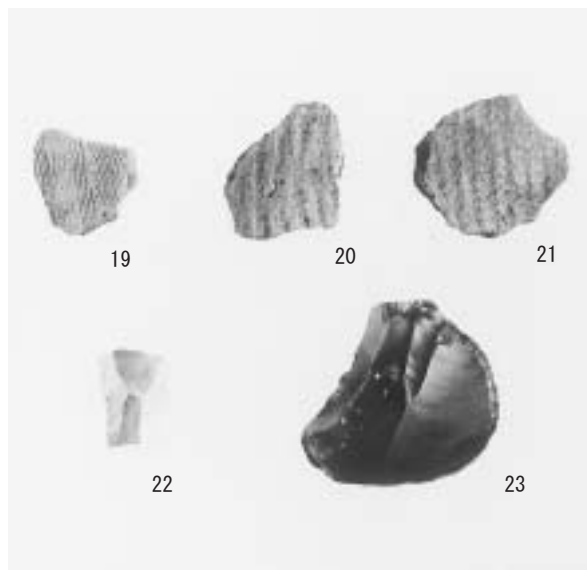
S I 03



S K 29 S I 03カマド



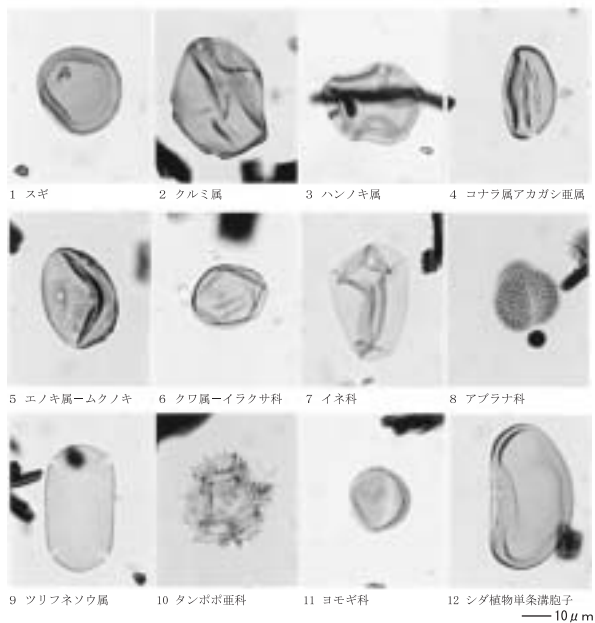
S K I 02



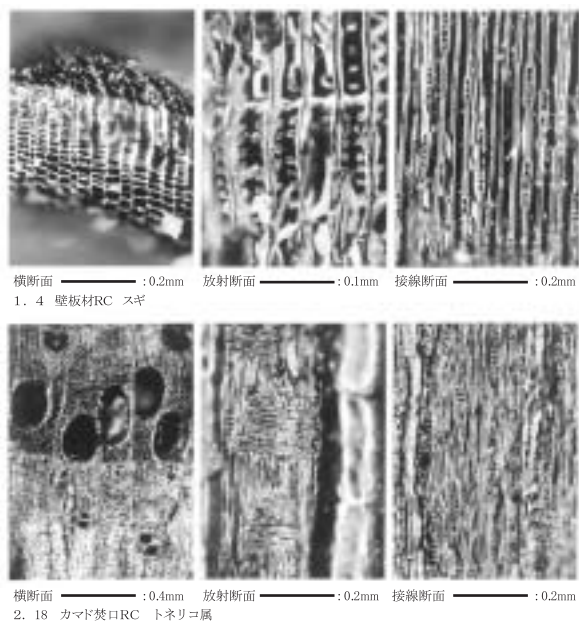
S I 03



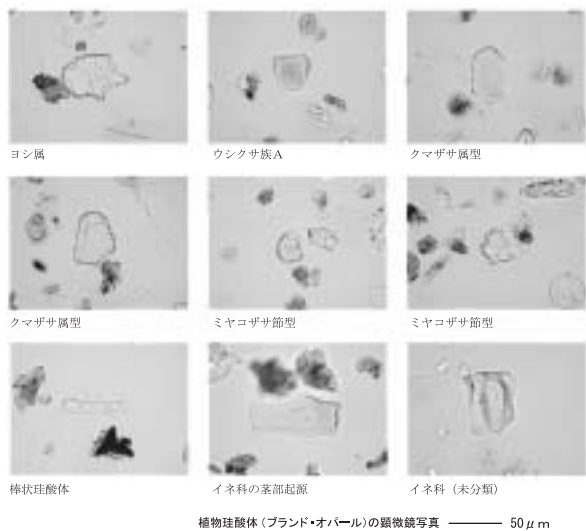
### 1 花粉分析



### 2 樹種同定



### 3 植物珪酸体分析



# 報告書抄録

ふりがな	ながのにいせき							
書名	長野Ⅱ遺跡							
副書名	国道105号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第369集							
編著者名	藤澤一史 遠藤 元 横山香菜子							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20 TEL0187-69-3331							
発行年月日	西暦2003年12月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
ながのにいせき 長野Ⅱ遺跡	あきたけんきたあきたけんぐん 秋田県北秋田県郡 もりよしまちよないざわあざ 森吉町米内沢字 ながの 長野 88-6	05323		40° 7' 59"	140° 23' 08"	20010517 ) 20011026	1,830m <sup>2</sup>	国道105号国 道道路改築 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長野Ⅱ遺跡	狩猟場	縄文時代	陥し穴	縄文土器・石器				
		平安時代	竪穴住居跡 竪穴状遺構 柱穴など	土師器				
		近世	井戸跡	陶磁器				

秋田県文化財調査報告書第369集  
**長 野 Ⅱ 遺 跡**  
—国道105号国道道路改築事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行	平成15年12月
編 集	秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL0187-69-3331 FAX0187-69-3330
発 行	秋田県教育委員会 〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号 TEL018-850-5193
印 刷	(有)高橋活版印刷



